

授業研究ハンドブックⅡ



広島市教育センター 平成18年3月

はじめに

各学校・園においては、現在、特色ある教育活動を展開することを通して、子どもたちに基礎・基本の確実な定着を図るとともに、学ぶ意欲や知的好奇心・探究心を育成していくなど、「確かな学力」を身に付けさせるための学習指導の工夫・改善が進められています。

子どもたちに「確かな学力」を身に付けさせるためには、教師のいわゆる「授業力」のより一層の向上に向けた取り組みが不可欠であり、その「授業力」を高める場である各学校・園内の授業研究（保育研究）を充実させていくことが必要となります。これまで各学校・園で行われてきた授業研究（保育研究）を振り返ってみますと、授業のプロセスや指導方法・技術等の妥当性や効果など、いわば教師側の「技術的実践」の向上に重点が置かれてきたように思います。しかし、これらの実践は、子どもの学びの状況に応じて適切になされてこそ、その効果を発揮するものではないでしょうか。

そこで、当教育センターでは、授業における子どもの学びの状況をつぶさに見取り、自分の指導方法等について振り返ることによって「指導と評価の一体化」を進め、個々の教師の授業の質を高め、より一層の授業改善へ結び付けていくための資料になることを目指して、昨年度、『授業研究ハンドブック』を作成しました。

この『授業研究ハンドブック』では、「子どもの学び」と「教師の実践」に視点を置き、教材研究の進め方や学習指導案の作成方法、授業展開における指導技術、さらには授業の評価について、わかりやすく、しかも、容易に実践化が可能となるような内容で構成しました。その結果、先生方から「授業計画案の見通しを持つことができた」「授業の振り返りの方法について理解できた」などの評価をいただくことができました。

しかし、各学校・園の研究主題に基づいて、具体的にどのように授業研究（校内研修）を進めていけばよいのか、また、その結果をどのように生かせば個々の教師の授業力を高めることができるのか、さらには、教師同士の「同僚性」や「協働性」はどのようにすれば高めることができるのか、といった、授業研究のマネジメントに係る課題の解決を求める意見も数多くいただきました。

そこで、これらの課題の解決に資するために、本年度『授業研究ハンドブックⅡ』を作成しました。

『授業研究ハンドブックⅡ』では、第Ⅰ章《授業研究（校内研修）の企画・推進》－第Ⅱ章《授業研究（校内研修）に視点を当てた学習指導案例》－第Ⅲ章《授業記録の取り方と研究協議会の進め方》－第Ⅳ章《授業研究の改善とその評価》の各章を通じて、具体的事例をもとに、図示・解説しながら、校内での授業研究を改善していくための要点をまとめることに努めました。それによって、校内での授業研究の活性化、個々の教師の授業力の向上、教師集団における意識の向上への道筋を示すことを意図しております。

本ハンドブックの内容については、今後もさらに研究を積み重ねていくべき部分もあるかと思いますが、『授業研究ハンドブック』と『授業研究ハンドブックⅡ』を合わせて、各学校・園における校内研修や教育実践の資料として、ご活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが、本ハンドブックを作成するに当たり、ご協力いただきました学校・園の先生方に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

広島市教育センター

所長 升尾好博

目 次

はじめに

目 次

頁

第Ⅰ章《授業研究(校内研修)の企画・推進》

- Q 1 授業研究とはどのようなものですか…………… 1
- Q 2 授業研究のねらいは何ですか…………… 2
- Q 3 学校教育目標と研究主題とはどのような関係ですか…………… 3
- Q 4 研究推進担当者は授業研究を
どのようにマネジメントするとよいですか…………… 5
- Q 5 授業研究を進めるための校内研修組織はどうあるとよいですか…………… 7
- 【コラム】高等学校では授業研究をどのように進めるとよいですか…………… 8

第Ⅱ章《授業研究(校内研修)に視点を当てた学習指導案例》

- Q 6 授業研究に視点を当てた学習指導案とはどのようなものですか…………… 9
- Q 7 授業研究に視点を当てた学習指導案にするためには
どのように工夫するとよいですか…………… 10
- Q 8 研究主題を学習指導案の中に位置付けるには
どのようにするとよいですか…………… 11
- Q 9 授業研究が充実するための学習指導案には
どのようなものがありますか…………… 13
- Q 10 学習指導案を作成するうえで
どのような工夫をするとよいですか…………… 15
- 【コラム】幼稚園では保育研究をどのように進めるとよいですか…………… 16

第Ⅲ章《授業記録の取り方と研究協議会の進め方》

- Q 11 なぜ授業記録が必要なのですか…………… 17
- Q 12 授業をビデオに撮って活用するにはどのようにするとよいですか…………… 19
- Q 13 授業後の協議会の充実を図るためには
どのような方法がありますか…………… 21
- Q 14 協議会を深めるためには付箋紙に
どのようなことを書くとよいですか…………… 25
- Q 15 プロンプターはどのように協議会を進めるとよいですか…………… 26
- 【コラム】特別支援教育の授業研究を
充実させるためにはどのようにするとよいですか…………… 31

第Ⅳ章《授業研究の改善とその評価》

- Q 16 授業研究の改善にはどのような方法がありますか…………… 33
- Q 17 授業研究の評価はどのように進めるとよいですか…………… 35

参考文献

実践事例の協力校

第 I 章 《授業研究(校内研修)の企画・推進》

Q 1 授業研究とはどのようなものですか

児童生徒はどのような先生を望んでいるのでしょうか。平成 12 年に広島市教育委員会が実施した『教育に関する調査』では、子どもたちに「あなたはどんな先生が好きですか」という質問をしました。この質問において、小学生(低学年・高学年)と高校生の回答で最も多かったのは、「授業が上手で分かりやすい先生」でした。中学生についても、僅差で第 2 位という結果でした。子どもたちから私たち教師へ向けての切なる願いが、この回答結果に表れているのだと思います。

では、「授業が上手で分かりやすい先生」であるために、私たちはどうすればよいのでしょうか。私たちは日々の授業実践において、「授業を構想し～展開し～評価する(振り返る)」という活動を行っています。この一連の活動により、私たちの授業における課題が浮き彫りになってくるわけです。この一連の活動を「(1) 課題を明確にし、(2) 課題解決の手だてを考え、(3) 実践を通して効果を確認、(4) 成果を後の授業に活かす」という PDCA サイクルに組み込み、そのサイクルを、教科～学年～学校全体へと浸透させることにより、授業研究が成立・活性化し、その結果、「授業が上手で分かりやすい先生」へとつながるのではないのでしょうか。



授業実践における課題解決の過程と教師のものの見方や考え方

Q 2 授業研究のねらいは何ですか

授業研究は、授業実践における課題を解決するための営みですが、課題を解決するためには、教師が自己の授業について改善しなければならない本質的な部分を見つけることが大切になります。そこで、授業研究においては、課題となる一つ一つの事象を表面的にとらえるのではなく、それぞれの事象の背景を探ること、そして、その際の教師自身のものの見方や考え方を明らかにすることが重要なポイントとなります。

このように授業研究のねらいの一つは、授業実践における課題解決の営みを通して、課題解決のために必要な授業技術を身に付けるとともに、授業の構想・展開・評価における自己のものの見方や考え方を広げたり深めたりすることにあります。

二つめとして、学校全体の教職員集団の意識を高めることです。授業研究の実施により、その過程で新たな知識・思考や技能等が蓄積され、教師自身や児童生徒の変容につながることは言うまでもありません。特に、学校全体の授業研究では、校内のすべての教師が、共通する課題に対して協働的に取り組むとき、その教師、児童生徒双方に与える直接的・間接的な影響は計り知れないものがあると思われまます。

また、授業研究を実施することによって、間接的な関連ではありますが、学校組織に不可欠な「同僚性」や「協働性」が育まれると考えられます。「同僚性」は「批判的友人関係」と解釈されており、同僚について単に批判するのではなく、同僚としてお互いが向上し合うことを意識しながら批判することと、とらえられています。「協働性」については、組織を構築するうえで、同じビジョンを持ち、目標を達成するために専門性を活かすとともに責任をもって学校内外において相互に協力することと理解されています。「同僚性」や「協働性」が醸成された風土、つまり、協働的な職場風土が学校内に育まれると、次のようなよさが生まれてくると考えられます。

- ① みんなが協力してよりよい教育を目指しているので、一人一人の教師の意欲を高めることができる。
- ② 教師一人一人の意欲が大切にされ、各自の個性が尊重されるとともに、それらが発揮され合う形でまとまってくる。
- ③ 教育実践や校務分掌に関する教師間の多様な意見を受け入れながら、議論する雰囲気を作ることができる。
- ④ 教育実践上課題が生じたときに、同僚からの援助や助言を得ることができる。等

以上の観点から、授業研究は、教師の自己研修と自己変革に最適の場であり、教職員研修の基盤として、大切なことであると考えられます。



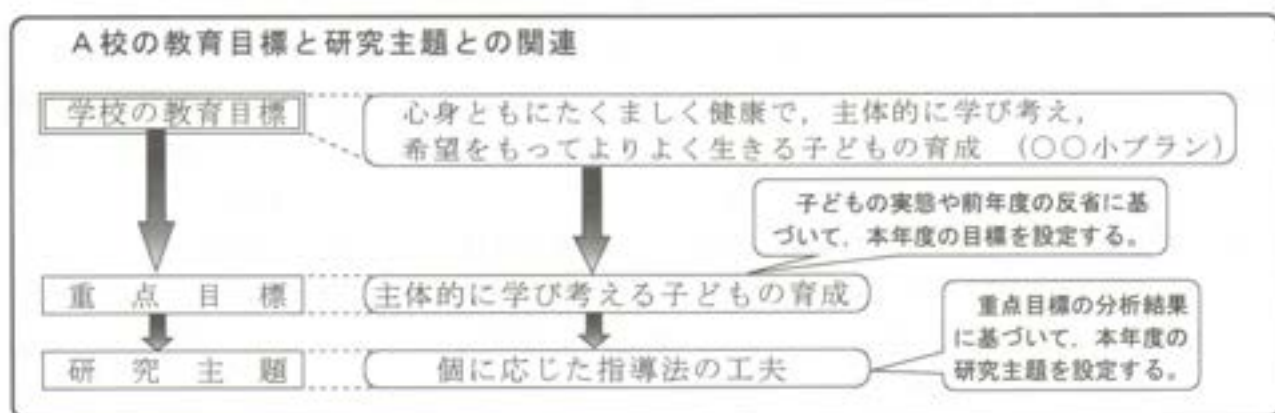
Q3 学校教育目標と研究主題とはどのような関係ですか

研究主題は、その学校の教育目標を具現化するためのもっとも効果的な方法を見つけ、実践するために設定されます。この研究主題を追究し、教育目標の具現化をより効果的にするためには、全教師がかかわり、教育活動の大部分を占めている授業を中心に話し合いを進め、実証し合っていくことが大切です。

こうした授業研究は、毎回単独の主題を設定し実施するよりも、年間を通して継続した一つの研究主題に基づいて授業研究を実施し、その成果を積み上げるとより効果的です。そのためには、児童生徒の実態を見極めたうえで、その学校において求められている教育課題に直結した研究主題を設定し、それに基づいて授業研究を行う必要があります。

1 学校の教育目標・重点目標と研究主題との関連

研究主題は、学校の教育活動とはなれて存在するものではありません。研究主題の背景として、その学校の教育目標やその年度の重点目標が深く関連しています。



2 研究主題についての共通理解

校内研修で教師一人一人が主体的に研究に取り組むことができるかどうかは、研究主題設定時における教師の共通理解に深くかかわっています。その研究をすることによって子ども一人一人をよりよく伸ばすことができること、さらに教師一人一人の資質の向上に役立つことなど、共通理解することが重要です。そのための手順を事例を基に、考えてみましょう。

B校では、

「自ら判断し、行動しようとする子どもの育成」

という学校教育目標のもと、この教育目標を全体的・構造的にとらえ、その具現化のために研究主題として、

**自分らしく、よりよく生きようとする子どもを目指して
— 学びを育む授業づくりを求めて — (2年次)**

を設定しています。

B校では、研究主題に迫るため、昨年から「学びを育む授業づくりを求めて」という副

題に基づき国語科を中心に取り組んできました。しかし、昨年度の授業研究を振り返ると、教師主導型の授業が多く、子ども同士の声がひびき合う授業に至っておらず、人の話を「聞き合う」関係ができていない実態も浮き彫りにされてきました。

そこで本年度の研究テーマを、

「聞く」ということを中心に、「相互交流」へと高めていけるような授業づくり

に設定することにしました。

研究テーマの決定後に、全教師が「聞く」に関する意識調査等を基にしながら、日々接している子どもの学習活動や生活行動の中での具体的な姿から、「聞く」ことや「相互交流」できる子どもとはどんな子どもだろうか」についてとらえ直していくことによって、研究テーマに即した具体的な取組が明らかになってくると考えました。

こうした取組の中から、B校では、目指す子ども像を次のように設定しました。

- 相手の立場や考えを尊重しながら、話を聞く子ども
- 自分の考えを持ち、友達と相互交流のできる子ども



以上のような手順に基づいて目指す子ども像を明らかにすることで、研究の方向性がより具体化していくこととなります。B校の以下のような「研究仮説」「仮説検証の視点」「検証の方法」「評価規準」は、共通理解への道筋をより確かなものとしています。

【研究仮説】

- 聞き取りカードなどの活用によって、「聞く」視点を明らかにし「相互交流」の場を設定するとともに、話し合いの場を振り返る活動を工夫・改善することにより、児童の「聞く」力を高め、学びを育む授業づくりが可能になるであろう。

【仮説検証の視点】

- ・聞き合う関係ができていたかを、子どもの姿から見取る。
- ・聞き合う環境づくりとして教師の発問、教材の提示などがどう影響していたかを振り返る。
- ・「聞く」環境を整え、日常的に聞く姿勢を育てているかを振り返る。

【検証の方法】

- ・振り返り(聞き取り)カード、録音、ビデオ、児童の意識調査、保護者の意識調査 等

【「聞く」「話し合う(相互交流)」の評価規準】

	第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年
【聞く】	<ul style="list-style-type: none"> ・大事なことを落とさないように聞くことができるようにする。 ○大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話の中心に気をつけて聞くことができるようにする。 ○話の中心に気をつけて聞き、自分の感想をまとめることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の意図をつかみながら聞くことができるようにする。 ○相手の意図を考えながら話の内容を聞くことができる。
【話し合う(相互交流)】	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合おうとする態度を育てる。 ○身近な事柄について、話題にそって話し合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで話し合おうとする態度を育てる。 ○互いの考えの相違点や共通点を考えながら進んで話し合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に話し合おうとする態度を育てる。 ○自分の立場や意図をはっきりさせながら、積極的に話し合うことができる。

Q 4 研究推進担当者は授業研究をどのようにマネジメントするとよいですか

研究推進担当者は、教職員の協働性が一層高まるように、次のような課題解決の過程を踏みながら、研究課題の明確化から授業実践の改善まで、各々の段階で授業研究をマネジメントしていくことになります。

(『授業研究ハンドブック(広島市教育センター 平成17年3月)』参照)

1 研究課題を設定しましょう(授業実践における課題の認識・明確化)

- ① 自分の授業の悩みや問題点を自覚したり、発見したりする。
- ② 問題点の要因を探り、検討する。
- ③ 検討した要因の中でもっとも核となる要因を課題として設定する。



【PLAN---課題解決のための手だての検討・構想】

2 課題解決の方策を立てましょう

- ① 研究を進める体制、組織(個人、グループ、全体)を決定する。
- ② 授業を実践する教科、単元、時期(期間)等を決定する。
- ③ 分析・診断に必要な授業記録とその作成方法を考える。
- ④ 授業記録を分析・診断する視点を設定する。
- ⑤ 授業記録を分析・診断する手法を選定し、授業改善策を立案する見通しを立てる。



3 授業を計画しましょう

- ① 学習目標(子どもの実態把握に基づく「目指す子ども像」)を明確にする。
- ② 教材研究をする。
- ③ 授業を評価(学習目標への到達状況を把握)するための視点を設定する。

【DO---課題解決のための手だての実施・授業の記録】

4 授業を実施し、記録しましょう

- <授業者> 授業の構想(学習指導案)に基づき、授業を実施する。
- <観察者> 何を記録するのかを明確にし、記録者の役割を分担する。



【CHECK---課題解決のための手だての評価(振り返り)→成果と課題の明確化】

5 授業を記録によって分析しましょう

- ① 指導と子どもの学習状況の相互関係を常に意識しながら分析・診断する。
- ② 改善すべき事項は、具体的な改善案を示しながら分析・診断する。



【ACTION---授業実践における成果の活用・修正】

6 授業の改善策を立てましょう

- ① 分析・診断の結果から学習指導案の修正をする。
- ② 改善の要点を今後の学習指導案に生かす。



研究推進担当者が授業研究のマネジメントを進めていくうえで、研究プロセスを踏まえた研究日程を設定することは、教育課程の中で研究を計画的に進めるためにきわめて重要なことです。研究日程は、①教育課程の編成時におおまかな枠取りをする、②研究主題や研究方法について共通理解した時点で全体構想に基づいた研究日程を決める、③教育課程や校内研修の進捗状況に伴って具体的な研究日程を確定したり修正したりする、という手順になります。

研修日程を決める場合、次のような点に留意しましょう。

- (1) 年度初めのなるべく早い時期に研究日程を明確にしましょう。
(見通しをもった計画を立てることができます。)
- (2) 教育課程の実施状況を考慮して効果的な日程を組みましょう。
(タイミングのよい研究日程が授業の充実につながります。)
- (3) 夏季・冬季・春季などの長期休業日を生かしましょう。
(時間的にもゆとりのある研究ができます。)
- (4) 日程の確定と同時に講師の依頼なども進めましょう。
(研究に対して具体的な示唆のできる講師を招くと効果的です。)
- (5) 全員が参加しやすいように、学年会や研究部会などとの日程調整を図りましょう。



学校の実態により、研究の月日や時刻の決定の手順に違いがありますが、月ごとの研究の展開を予定しておき、細部を前月末に決定する、研究授業の日時については年度初めに確定しておくなど、柔軟な対応ができるようにしましょう。

【C 小学校における研究プロセスを踏まえた研究日程の例】

- ① **実態把握(3～4月)**
「子どもの「聞く」に関する意識・実態調査Ⅰ」
課題点を浮き彫りにすることができる調査項目を考えて、実態調査を実施する。
- ② **実態調査の分析(4月)**
どのような課題があるのか、また、どのような改善策が考えられるか、アンケートを集計し、グラフ化すること等によって分析する。
- ③ **研究仮説の設定(4月)**
実態調査の分析に基づき、学びを育む過程において「聞く」力をどのように位置付け、どのような指導や支援で「聞く」力を子どもに身に付けさせるのかを明らかにする。
- ④ **「聞く」力を身に付けさせるための基礎的研究(4～5月)**
学びを育む過程をどのようにとらえ、「聞く」力をその過程の中でどのように作用させ、位置付けるのかを基礎的研究で明らかにする。また、そのための具体的な指導や支援の方法を協議し、共有化を図る。
- ⑤ **実証授業と分析考察Ⅰ(5～7月)**
授業後の協議・分析内容は、基礎的研究で共有化を図った支援や方法を中心とする。
- ⑥ **実証授業と分析考察の見直し(8月)**
1学期の実践の見直しで、講師を招いて取組の修正を行う。
- ⑦ **実証授業と分析考察Ⅱ(9～1月)**
講師・指導助言者のアドバイス等を基に、支援や方法の改善を行い実証授業を行う。協議会は、改善した視点をもとに行う。
- ⑧ **実態把握(1～2月)**
「子どもの「聞く」に関する意識・実態調査Ⅱ」
- ⑨ **総括的な分析・考察(2～3月)**
どの力が伸びて、どの力が伸びなかったのか。
また、どのようなことがそれらの要因になったのか等の分析を行う。
- ⑩ **研究のまとめと次年度の研究方針(3月)**



Q5 授業研究を進めるための校内研修組織はどうあるとよいですか

校内研修の組織の中核になるのは研究推進委員会(学校によっては研究部や教務部)ですが、研修と指導は密接な関連をもって進める必要があるため、学年とのかかわりをどう押さえるか、また教科、道徳、特別活動等の指導組織とのかかわりをどうするか、さらには研究主題達成にどういう方向から迫るか等が編成上のポイントになります。

〔研究主題に即して組織した例〕

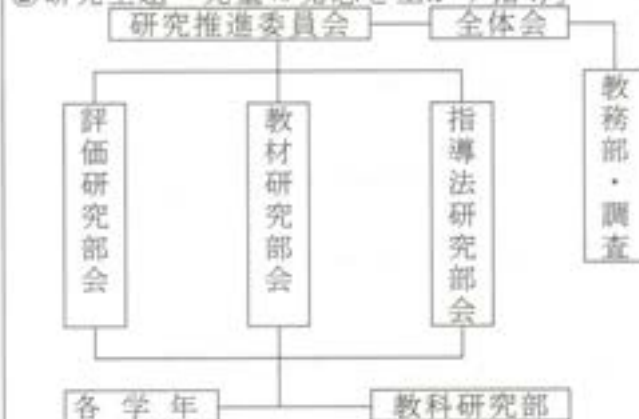
①研究主題「豊かな心をもち、よりよい生き方を求めて、実践する子どもの育成」



①は、学校として道徳という一領域に研究対象を限定して進めていく場合の研究組織例です。

- ・道徳のように研究領域を限定した場合、校務分掌をそのまま生かすことができにくくなります。また、担任を中心とした研究になりがちです。
- ・そこで、全教師が授業実践部会か専門部会に所属することにより、全教師が研究に取り組む体制をとることができます。

②研究主題「児童の発想を生かす指導」



②は研究主題を追究する三つの方向、指導法・教材・評価で研究部会(分科会)を構成し、各学年や各教科研究部から各々参加する場合の研究組織例です。

- ・研究主題は国語、算数のように1教科に関するもの、道徳の時間や特別活動等の領域に関するもの、児童生徒会の活動や諸行事に関するもの、情操教育・道徳教育のように、全教育活動を通してその育成を図るものなど、その内容も性格も多岐にわたります。

③研究主題「基礎基本の徹底を図る指導法の工夫」



③は研究主題を追究する教科を設定し、それをさらに指導法にかかわる場面に分けた場合の研究組織例です。

- その他の校内研修組織として
- ・行事ごとにプロジェクトチームをつくり、計画－実施－評価が一段落すれば解散し、次のプロジェクトへ移行する方法もあります。また、家庭や地域との連携を主題とするような場合には、外部の組織を一部に加えるような方法も考えられます。



【コラム】高等学校では授業研究をどのように進めるとよいですか

国立教育政策研究所の「学習意欲に関する調査研究（平成14年8月）」によると、授業において学習意欲を高めるには、「よくわかる授業をすること」と「おもしろい授業をすること」という調査結果が出ています。

生徒の学習意欲を引き出し、わかる授業を展開するには、授業における私たち教師の力量（授業力）を高める必要があります。ところが、ややもすると少しマンネリ化した授業になってしまいがちではないでしょうか。

小学校や中学校等では、早くから校内研修や授業研究が広まり、学び合いの文化が浸透しています。それらの事例を参考にして、教科の専門領域のプロとして授業で勝負できるよう、協動的な授業研究を始めてみませんか。

教師一人一人の授業力向上により、生徒一人一人の確かな学力の定着と進路の保証を図り、魅力ある学校づくりにつないでいきましょう。



1 生徒の授業満足度を高めるためには

次のことを意識することから始めましょう。

- 生徒の実態に応じて教材や指導方法を工夫し、生徒の学習への興味・関心を高める。
- 指導計画に基づいて指導を実施し、教科指導の目標を達成する。
- 指導の過程で生じた課題に基づいて、指導方法を工夫・改善する。

2 そのための授業研究の具体的な方法は

これまで高等学校では、授業研究があまり活発に行われていませんでしたが、平成15年度頃より、「学校へ行こう週間」等で校内で授業を公開する機会が増えました。平成17年度は、市立高等学校内で教科毎に分かれて指導主事による指導・助言を含めた公開授業も行われました。

教科・科目の専門性の高さから、このような教科別の授業研究の実施も考えられますが、担当教科・科目の違いを活かして校内で協働的に行うことは、授業を観察する視点が多様化し、協議も深まるというメリットがあります。

授業後の研究協議会では、指導方法の工夫点や改善点等、共通の協議の視点を設定し、建設的に意見を出し合う場になるように進めていきましょう。

3 授業研究を進めていく上での悩みはどのように解決すればよいのですか

- 指導案の書き方がよくわからない。
- 授業を観察する視点がわからない。
- 研究協議会の進め方がわからない。など



この『授業研究ハンドブックⅡ』には、小・中学校での事例が紹介されております。有効に活用し、全教職員で授業研究を推進し、授業改善につないでいきましょう。

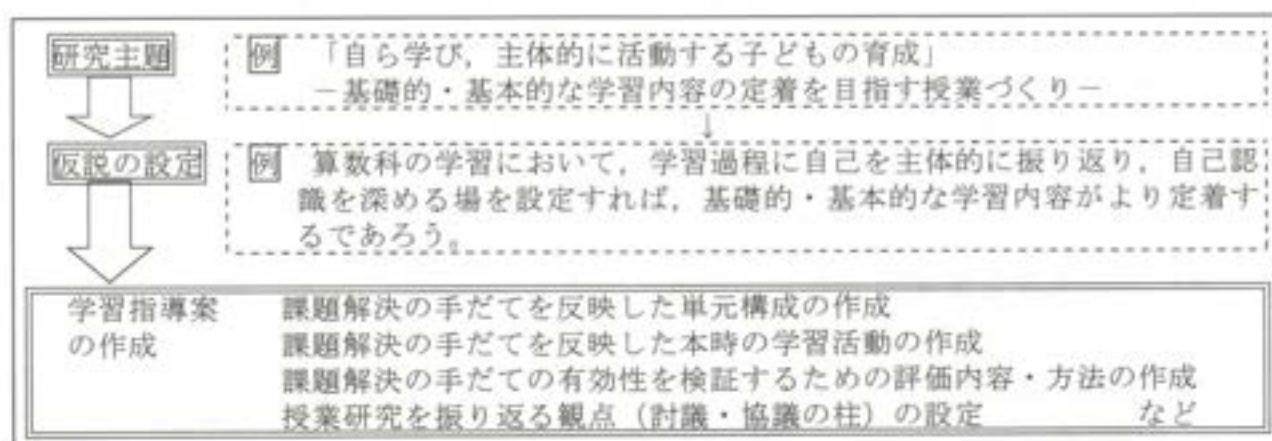
第Ⅱ章 《授業研究(校内研修)に視点を当てた学習指導案例》

Q6 授業研究に視点を当てた学習指導案とはどのようなものですか

学習指導案は、教材研究を通して具体化した「教材観」、「子ども観(児童生徒観)」、「指導観」に基づく指導と評価の計画等を整理し、まとめたもので、いわば授業を行うための計画書であり教師にとってのシナリオです(学習指導案作成の具体的な内容については、『授業研究ハンドブック』(広島市教育センター 平成17年3月)をご覧ください)。

校内研修として授業をする際には、校内研修のねらいに視点を当てた学習指導案を作成することが必要です。具体的には、学校の研究主題をふまえたねらいと課題解決の手だてを設定し、それを反映した学習活動を構成していくことが重要なポイントとなります。

次に学習指導案の作成までの流れの例を示します。



研究主題をもとに授業のねらいと課題解決の手だてを設定し、それをふまえた学習指導案を作成することにより、以下のように授業研究(校内研修)の充実を図ることができると思われます。

- 授業のねらいと課題解決の手だてを反映した単元構成、学習活動に沿って授業を進めることが、研究主題及び授業のねらいと課題解決の手だてを具現化・検証するための具体的な方法になります。こうした授業を行うことにより、研究主題に示されたねらいの達成、あるいは研究の積み重ね・継続発展につながります。
- 課題解決の手だての有効性を検証するための評価内容・方法を具体化することにより、授業者および観察者が、授業のねらいや内容を把握し、授業を見たり振り返ったりする視点を明確にもつことができます。
- 授業研究を振り返る観点を設定することによって、教科・領域を超えて協議を行うための共通のテーマを設定することができ、全職員による授業の検証が可能になります。



Q7 授業研究に視点を当てた学習指導案にするためには

どのように工夫するとよいですか

校内研修として授業を行う際の学習指導案の作成において、学校の研究主題をふまえたねらいと課題解決の手だてを設定し、それを反映した学習活動を構成していくことが重要なポイントであることは、前の項で述べたとおりですが、具体的にはどのようにすればよいでしょうか。以下の二つの視点から検討してみたいと思います。

1 学習指導案の内容の工夫

学習指導案の内容や形式には本来定型はありませんが、一般的には次のような項目をあげて作成する場合があります。

- ① 教材等の名称、指導者名、指導日時・場所、対象学年・学級、単元(題材・主題)名
- ② 単元(題材・主題)について[教材観、児童生徒観、指導観]
- ③ 単元(題材・主題)の目標
- ④ 単元の評価規準
- ⑤ 指導と評価の計画(本時の位置付けを明記する。)
- ⑥ 本時の目標
- ⑦ 指導過程と評価(学習内容・学習活動、指導・支援の工夫、評価の観点、評価の方法など)



それぞれの項目を作成する際に、研究主題をふまえたねらいと課題解決の手だてを意識して、それと結びついた内容となるように工夫することが必要です。

例えば、項目に次のような内容を盛り込むことが考えられます。

② 単元について [教材観]

→研究主題をふまえたねらい及び課題解決の手だてをどのように位置付けるかを書く。

② 単元について [児童生徒観]

→研究主題及び仮説に係る既習経験や現状など、児童生徒の実態を書く。

② 単元について [指導観]

→ねらいにどのような手だてをもって達成していくのかを具体的に書く。

③ 単元の目標、④ 単元の評価規準、⑥ 本時の目標

→研究主題及びねらいと課題解決の手だてに位置付けて書く。 など

2 学習指導案の形式、構成の工夫

学習指導案に、研究主題及びそれに基づいた仮説に関する項目を新たに加えたり、単元の指導計画や本時の学習指導過程に、これらに関する欄を設けたりすることで、研究主題及び仮説と学習活動とのリンクを明確に示す工夫も考えられます。

例えば、次のようなことが考えられます。

- 「研究主題とのかかわり」という項目を学習指導案の中に新たに設け、研究主題と学習活動の関連や、参観者に見てほしいポイント、協議の柱等について記述する。
- 単元の指導計画に、研究主題を基にした「ねらいとする子どもの姿」を記入する欄を設ける。
- 本時の学習過程に、「期待する子どもの意識」など、研究仮説検証のために必要な欄を設ける。

Q8 研究主題を学習指導案の中に位置付けるにはどのようにするとよいですか

前項の p.9～10 で述べた「学校の研究主題を位置付けた学習指導案」とは、具体的にどのようなものなのかを、D 中学校の国語科の学習指導案を例に説明します。

D 中学校の研究主題

すべての生徒の学びを保証するための

「活動的で協同的で表現的な学び」を中心とした授業の追求

ねらいと手だて

(ねらい) 「活動的で協同的で表現的な学び」を中心とした授業を追求するために、教師が一方向的に知識を伝達し暗記させるなど、教え込む授業から、他者とのコミュニケーションがある「学び」へ授業を変える。

(手だて) 1時間の授業の中に「活動（個人作業）」「協同（小グループ活動）」「表現の共有（ダイアログ的対話）」の3要素を組み込み、一人一人の学びを保証する授業を目指す。

学習指導案の作成

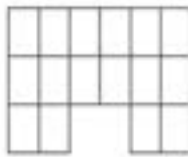
1 ねらいと手だてを反映した単元構成の作成

学習指導案の「5 単元について」「6 単元の目標」に、研究主題である「活動的で協同的で表現的な学び」を成立させるために、「活動」「協同」「表現の共有」の3要素を、どのように本単元に組み込み、学習を進めていくかが具体的に示されています。

国語科学習指導案		指導者 広島市立〇〇中学校 教 員 〇 〇 〇 〇
1 日時	平成17年〇月〇日(〇)6校時	
2 場所	南校舎〇階 1年〇組教室	
3 学年・組	第1学年〇組の中教(男子〇名、女子〇名)	
4 単元・教材名	6 自分を見つめる・「空中ブランコ乗りの今年」(3校時)	
5 単元について	(1) 教材観 「読むこと」の第1学年の目標は、・・・(中略)・・・を指導することが求められている。本教材は、第1学年で学習する二巻目の物語教材である。この「空中ブランコ乗りの今年」は新活動やたくさん人の情緒で忙しかった夏休みや、体育祭・文化祭という大きな行事などを体験し、「読」のころよりもずっと「中学生らしく」なった生徒たちが、 <u>自分自身と関わらねながら読み探っていくのに読み応えのある教材</u> である。自分にとって大切なものが生まれてきているであろう生徒たちは、 <u>作品中のブランコ乗りの今年にどう共感し、僕にどこに感動点を感ずるのか、この作品とどのような出会いをするだろうか、どう読んで学習することを通して、出逢った感想などを十分に交流することによって、「イ」文章の展開を確かめながら主題を考えたり要旨をとらえ、「オ」文章に書かれているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広げる</u> <u>力を働かすことに有効な教材</u> であると考え、	教材観には、一人一人が教材とじっくりかかわり、自分で何らかの考えをもつ「活動」における本教材の意義が述べられています。
(2) 生徒観	本学級の生徒は、・・・(中略)・・・	
(3) 指導観	本教材の指導に当たっては、 <u>ブランコ乗りの今年の生き方を自分に引きつけて読解的に読み向きが自分の読みを深めることを見極め、一人ではなく、協同的に読むことによって、多角的な読みが存在し、自分の読みと比較することを通して、ものの見方や考え方を深めたい。</u>	指導観では、個人作業である「活動」を、少人数での学習を通して十分に交流（協同）することを通して、「表現の共有」を目指すことが述べられています。
6 単元の目標	作品と向きあって考えたり感じたりしたことや自分の思いを他人と交流し、 <u>合うことにより、経験を自分なりに読み探る楽しさを感じたい。</u> <ul style="list-style-type: none"> 四コマ漫画に読むことを通じて、主人公の心情やその変化を感じながら読むことができる。 今年の生き方について、<u>自分はどう思うのか、自分自身と向き合ってみることができる。</u> 	目標にも、他者とのコミュニケーションを通して一人一人の学びを大切にすることが述べられています。

2 わらいと手だてを反映した本時の学習活動の作成

本時の学習指導案への研究主題の位置付けの例です。

学習活動	教師の指導・支援	評価基準
<p>9 本時の目標</p> <p>四回宙返りを決意する場面や四回宙返りに挑む場面にかかわる「キキに聞いてみたいこと」について<u>読みを交流することを通して、全員で読み深める楽しさを感じ取る。</u></p> <p>10 本時の学習展開と評価の観点</p> <p>1 本文全体を全員が交代しながら読む。</p> <p>2 「キキに聞いてみたいこと」の中から最も強く疑問に思ったことについて、自分の読みを交流し合う。</p> <p>① なぜ四回宙返りをするに決めたのか。</p> <p>・四回宙返りは怖くないのか。</p> <p>・なぜおばあさんに「澄んだ青い水」をもらったのか。</p> <p>(留意させたい点)</p> <p>＊お父さんを三回宙返りの失敗で亡くしている。</p> <p>＊キキはサーカスの中で、一番人気があった。拍手してもらえないくらいなら死んだほうが良いと考えている。</p> <p>＊おばあさんがキキをきびしく現実と向き合わせた。</p> <p>② キキは本文中のどこで四回宙返りを決意したのだろう。</p> <p>・どんな気持ちで決意したのか。</p> <p>③ 四回宙返りを決意し、読んでいったとき、キキはどんな気持ちだったのだろう。</p> <p>3 自己評価表に本時の感想などを記入する。</p>	<p>・ あらかじめ書き込んだワークシートを基に、<u>3～4人のグループで意見交流させる。</u></p> <p>・ 交流があまり進んでいないグループには初階指導の際に声をかけ、<u>仲間とのつながりをもてるように発言を行う。</u></p> <p>・ 本文のどの部分からそう思ったのかを示しながら、考えを伝えるように声をかける。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>・ <u>席をコの字型にして全員で意見交流し合う。</u></p> <p>・ <u>できるだけ多くの生徒が自分の読みを発言できるように、グループ活動の様子や表情などを観察しておき、手を挙げていない生徒へも意図的に発言を求め、</u></p>	<p>【言語事項】</p> <p>A 表現豊かな読み</p> <p>B 正確な読み</p> <p>C たどたどしい読み</p> <p>【読むこと】</p> <p>A つわいに本文にかえり、自分の読みを確かなものにし、他者の発言から自分の感じ取ったことや考えたことをさらに深めることができる</p> <p>B 自分なりの読みをつかみ、自分の考えを伝えることができる</p> <p>C 自分の気づきや感じたことをまとめたり発言することができる</p>

「活動」として…

全員で学習をしていくことを意識化させるために、全文を分担して音読する活動が取り入れられています。

全員が自分なりの読みを持つために、前時からワークシートが活用されています。

「協同」として…

全員が自分の読みを交流することによって、ものの見方や考え方を深める楽しさを味わうために意見交流の場が設定されています。

「表現の共有」として…

意見交流を活性化するために席がコの字型に配置され、他者とのかわりの中で、自分の考えを吟味し、考えを補強したり広げたりできるように、交流の場が設定されています。

一人一人の学びを大切に…

「読むこと」の力を考慮した支援やことばかけが行われています。

3 授業研究を振り返る観点（討議・協議の柱）の設定

以下の3点を振り返りの観点として協議会が進められました。

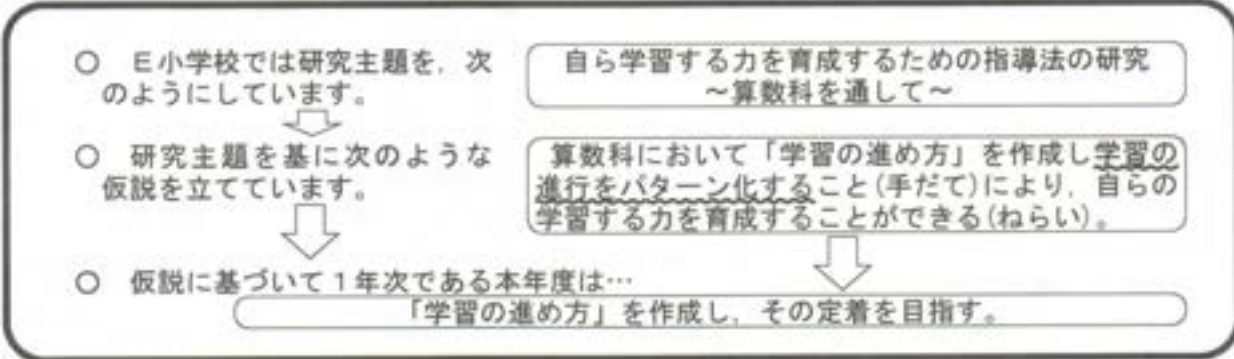
＜授業を見る視点＞

- ・ 全員が自分の考えを発言することができたか。
- ・ 意見交流を通して、自分の考えを深めることができたか。
- ・ 指導者の支援やことばかけが、全員で意見を交流して考えを深めていく楽しさを味わうことに効果的であったか。

Q9 授業研究が充実するための学習指導案にはどのようなものがありますか

校内研修をより充実させるために、多くの学校では、学習指導案に工夫を加え、学校で共通の書式を作って取り組まれているようです。そこで、ここでは、学習指導案に校内研修の研究主題とのつながりや研究授業を参観する視点を位置付けている事例を紹介します。

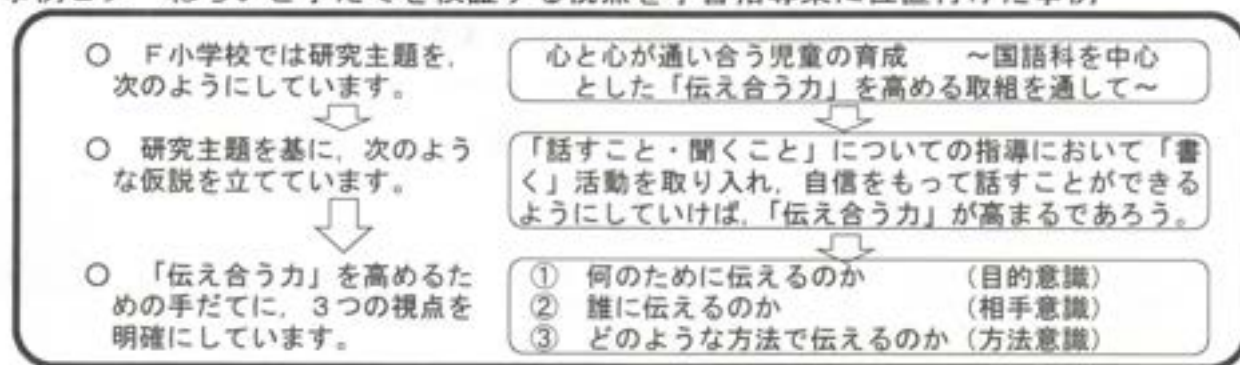
<事例1> 研究主題とのつながりを学習指導案に位置付けた事例



学習指導案には…

算数科学習指導案	
1 日時、場所	
2 学年 第2学年	
3 単元名 かけ算(2)	
4 単元設定の理由	
5 単元目標	
6 研究主題とのつながり	本單元における「学習の進め方」の具体的な方策を、学習指導案のここに位置付けることにより、研究主題とのつながりをもたせています。
	「子どもたちが自分たちで算数の学習を作り上げていく」学習集団を目指すために、次のように学習パターンを決め、見通しをもたせて学習を進めていきたいと考える。
課題把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ めあてを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師がめあてを板書する。 ・ 全員で声に出して読む。 ・ めあてをノートに書く。
自力解決	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「自分だけの時間」を確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が時間を提示する。 ・ タイマーを活用し、時間になると学習リーダーへ知らせる。 ・ 自力解決を終え、集団解決にはいる。 ○ 解決方法を考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えをノートに書いたり、操作結果を机に残したりする。 ・ 困ったことや質問がある場合は、黙って手を挙げて教師を待ち、ヒントカードを受け取る。 ○ 発表の準備をする。
集団解決	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表する。聞く。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えを半具体物や絵、図等を利用してわかりやすく説明する。 ・ わからないことを発表者に質問する。 ・ 互いの考え方の違いやよさに気づけるようにし、よりよい解決の仕方を見つける。 ・ 学習リーダーが発表者を指名して学習を進める。
整理と発展	<ul style="list-style-type: none"> ○ まとめをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が、考え方の良さに着目し、学習のまとめをする。 ○ 確かめをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 5分間プリント「今日のけいさん」をする。 ○ 次時の確認をする。
7 指導計画	
8 本時の学習活動	
(1) 目標	
(2) 学習展開	

<事例2> ねらいと手だてを検証する視点を学習指導案に位置付けた事例



学習指導案には…

国語科学習指導案

1 日時、場所
2 学年 第4学年
3 単元名 「環境を守る工夫」を紹介しよう
～ウミガメのはまを守る～

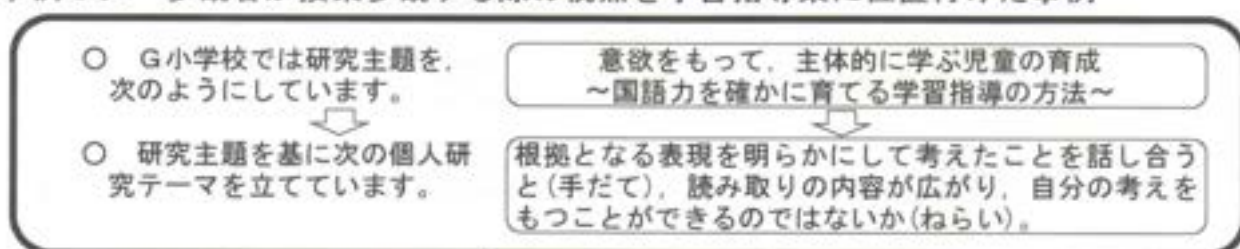
4 単元設定の理由
5 単元目標
6 伝え合うための三つの視点

何のために伝えるか	環境等について学んだことを知ってもらい、そのときに出された質問を基にして、今後の「わたしたちができること」に修正、工夫、変更を加えることによって、実現性を高めるために伝える。
だれに伝えるか	班→学級→学年→学校・地域の方々
どのようにして伝えるか	教材文を参考に自分の考えを分かりやすく環境レポートにまとめる。その環境レポートをポスターにまとめ、繰り返し班ごとに発表練習を行った後に、自分たちの考えを自信をもって発表する。

7 単元の評価基準
8 単元の指導計画
9 本時の学習活動 (目標と学習展開)

本単元における「伝え合うための三つの視点」を学習指導案に位置づけることにより、授業を振り返る視点が明確になります。

<事例3> 参観者が授業参観する際の視点を学習指導案に位置付けた事例



学習指導案には…

国語科学習指導案

1 日時、場所
2 学年 第5学年
3 個人研究テーマ

4 単元名 「注文の多い料理店」

5 単元設定の理由
6 単元目標
7 単元の評価基準
8 単元の指導計画
9 本時の学習活動

(1) 目標
(2) 学習展開
10 参観の視点

根拠となる表現を明らかにして考えたことを話し合うと、読み取りの内容が広がり、自分の考えをもつことができるのではないか。

観察の視点が明記されていることにより、後の協議会で協議する内容が焦点化されます。

観察の視点だけでなく、検証の方法も記載しておくことで、より視点が明確になります。

根拠を明らかにしながら、二人の人物像に対して自分の考えを持つことができたか。また、話し合いにより、さらに深まっているか。……
検証の方法：発表、ノートの書き込み、感想、自己評価カード

Q10 学習指導案を作成するうえでどのような工夫をするとよいですか

授業研究に視点を当てた学習指導案づくりを進めるうえで大切なことはいろいろありますが、ここでは、

- 教職員の共通理解のもと、学習指導案づくりを進めていくこと
- 作成した学習指導案をより質の高いものに練り上げていくこと



という二つの視点から、学習指導案づくりを進めるうえでの工夫を考えてみたいと思います。

1 教職員の共通理解を図りつつ、学習指導案づくりを進めていくための工夫

校内研修は、研究主題やそれを設定した背景について教職員の共通理解のもと進めていくことが大切ですが、学習指導案づくりにおいてもそれは同様です。

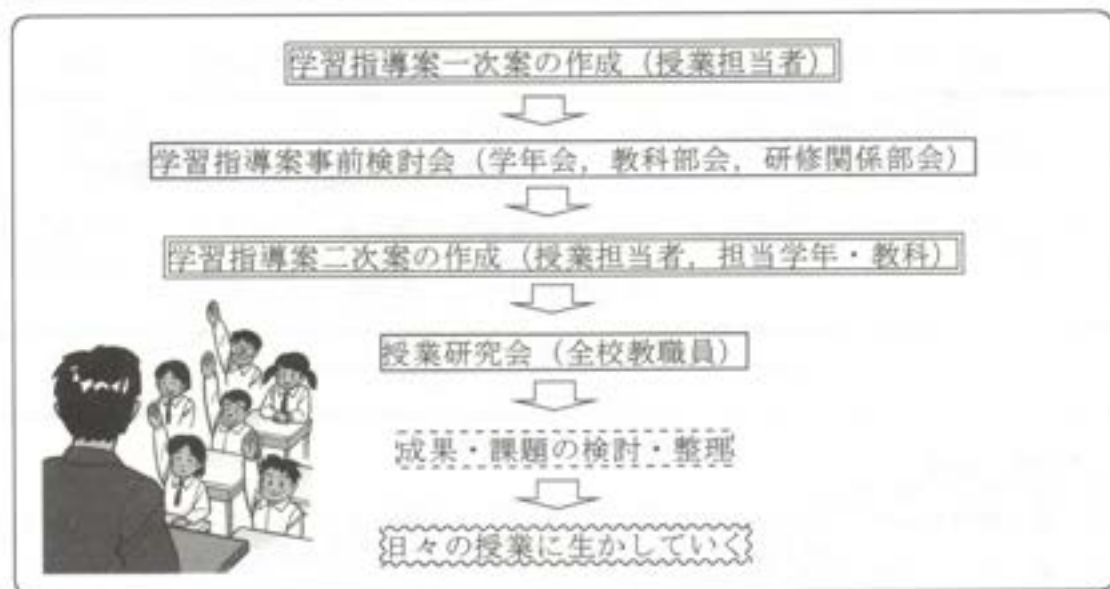
そこで、年度当初に、学習指導案の様式を示した文書を作成しそれを教職員に配布し、記載する内容について確認しあうことが有効であると思われます。研究主題が前年度と大きく変更のない場合には、前年度作成された学習指導案を活用することも可能です。

このような確認・話し合いの場を確保することで、学習指導案の作成に対する教職員の意識の共有化を図り、その後の校内研修の充実につなげることが可能となります。

2 作成した学習指導案をより質の高いものに練り上げていくための工夫

学習指導案をより質の高いものにしていくためには、その検討・改善をどのようにしていくかが重要です。

以下にそのための事例として、試案である一次案を元に二次案を作成し、それをを用いて授業研究を行い、その成果と課題を検証して日々の授業に生かしていく方法を示します。



この方法では、授業担当者だけでなく、担当学年・教科の教師や教務主任や研修主任などが参加して事前検討することにより、研究主題との関連や仮説の吟味・検討が深まり、より質の高い授業づくりが期待されます。また、授業研究会で終了するのではなく、その結果をふまえて、成果や課題を検討したり整理したりすることで、授業の改善点をより明確にし、研究したことを日々の授業に生かしていくことができます。

【コラム】幼稚園では保育研究をどのように進めるとよいですか

教師一人一人の資質・能力を向上させるために、園内研修を充実させることは幼稚園においても重要な課題の一つです。

そのために、園の研究主題をふまえた仮説を設定し、それに沿って保育の構成をしていくことが重要であることは、他の校種と同様です。ただし、幼稚園教育においては、幼児の自発的な活動の中から幼児の様子を見取り、指導に生かしていくことが重要であるため、どのような場面から、何をどのように見取るかを明確にして、保育者と観察者の共通理解を図りながら保育研究を進めていくことが特に必要になります。



そこで、保育研究の実施に当たっては、次の2点に留意することが必要です。

- 研究主題及び仮説に照らし合わせて、幼児のどのような言動（つぶやき、表情・視線、行動など）に着目するのか、その視点を明確にするための工夫をする。

見取りの視点づくりの事例 「研究主題 幼児の自主性・やる気を育む教師の支援」

幼児の心の動き	自主性・やる気の高まりを見る視点		
	【つぶやきの事例】	【視線・表情の事例】	【行動の事例】
0 興味がない	「・・・」	ぼんやりしている 表情が乏しい 気が散りやすい	目当てがもてない 友達について動いている 行動が定まらない
1 心が動く	「あれ？へえー」 「これ、なあに」 「〇〇、見せて」	じっと見つめる 関心をもって見る 考え込んでいる	耳を傾ける 歓声をあげる 身振りや低えようとする
2 やってみたい	「～やってもいい」 「～してみようかな」 「～したい」	身を乗り出してみる 対象を見る	対象に近づく 対象にふれる 対象と同じものを探す
3 やってみる	「こんな風にしよう」 「～ってどうするん」 「〇〇、教えて」	対象を注視する	試してみる 同じことを繰り返す 教えてもらいながらする

- 保育の内容に合わせて、個人（あるいは個人と周りの関係）を見るのか、グループを見るのか、全体を見るのかなど、どの場面を観察対象にするのかを明確にしたうえで、それを見取り記録するための用紙等の工夫をする。



観察対象の幼児を見取る記録用紙の例

グループを見取る記録用紙の例

保育観察記録用紙

時刻	教師の支援・幼児の活動	観察対象の状況	
		A児	B児

保育観察記録用紙

時刻	子どもの活動の様子(全体の状況等)	グループの活動の様子(作業・状況等)	教師の支援(指示・質問・評価等)

第三章 《授業記録の取り方と研究協議会の進め方》

Q11 なぜ授業記録が必要なのですか

授業の中では、子どもたちの中に数え切れない程の出来事が起こっています。授業記録は、授業を客観的にとらえ、授業の事実に基づき、授業後の研究協議会を充実させるための資料として必要です。一つ一つの場面に着目し、授業者や観察者の授業の見方や考え方を確認することが可能になり、お互いの考えを共有することで、子どもたちに起こった出来事や教師の指導の効果等を理解する学びの場が生まれるなど、共通の観察の視点をもって研究協議会を深めることができます。

1 授業記録を書くことのよさ

- ◎ 子どもや教師の様子を細かく見取ろうとする意識が働き、授業を集中して見ることができる。
- ◎ 見取り、授業の様子を文章化することにより、自分の見方や考え方を明確にすることができる。
- ◎ 自分が記述したことについて意見を述べたり聞いたりすることにより、自分の見方や考え方を具体的に振り返ることが可能となる。

2 授業の事実を記録する授業記録の取り方

(1) 何をどのように記録するのか

記録用紙等には授業者と学習者の発言や行動を記録していきませんが、記録する内容には次の4項目があげられます。その中で、特に何を中心に見取るのかという観察の視点（例えば、授業者の意図と子どもの受け止めがずれていると感じたところ等）については、事前に観察者に知らせておきましょう。同じ視点で見取りをすることで、研究主題に迫る研究協議を進めることができます。



- 教師の授業展開（説明、発問、指示等）
- 教師の行動（板書、机間指導、表情、声の大きさ等）

- 子どもの反応（発言、つぶやき、質問内容等）
- 子どもの情意面（表情、態度、意欲、しぐさ等）


(2) 研究授業観察記録用紙の種類と特性

一般的には、あらかじめ記録する項目が印刷された「記録用紙」を使いますが、最近では、「付箋紙法」を用いた事例も報告されています。

ア 「記録用紙」を使う場合

記録用紙は、あらかじめ用意された項目にしたがって、教師と子どものかかわりや子どもの学びの様子を時系列に記録し、変化を見取ることができます。次ページに3種類の記録用紙のパターンを示しましたが、見取る対象や観察の視点に合わせて、各学校・幼稚園で工夫して作成するとよいでしょう。

(7) 主に「学級全体」を見取る場合の例

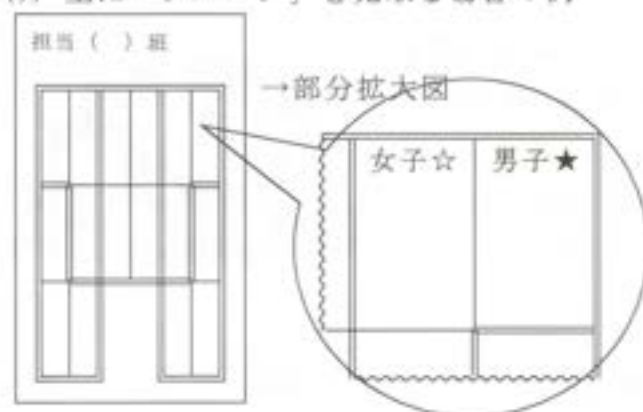
時刻	観察の視点	指導者の発問・指示等、支援の様子	児童・生徒の反応、活動の様子	板書・全体の様子、気づき等
14:30 14:35	※経過時間ではわかりにくい場合があるので、時刻で記録しましょう。	※教師の働きかけや支援など、具体的な教師の言葉を書きましょう。	※子どもの発言、行動、表情等を具体的な姿で記録しましょう。	

(4) 主に「個」を見取る場合の例

時刻	教師と児童・生徒との関わり合いの様子		観察対象児童・生徒	
	教師の援助	児童・生徒の活動の様子	A児	B児
	※教師の指示内容や一緒に行動した様子等を書きましょう。	※全体の児童（周りの児童）の様子等を書きましょう。		

※観察対象の子どもを決めて、教師と子どものずれを見るときには、とても有効です。

(9) 主に「グループ」を見取る場合の例



名前やその子どもの学びの特徴をあらかじめ記号などを使って示しておく、観察者がより記録しやすくなります。グループでの活動を見取る場合は、あらかじめ観察者がどのグループを見取るかを決めておきましょう。それぞれどこか一つのグループを集中的に見取ることにより、その後の協議会でグループ間の学びの様子の違いを交流することができます。

1枚の用紙にすべての子どもを記載しておく、協議会の記録としても活用できます。

イ 「付箋紙法」を用いた場合

付箋紙を用いると、協議会に全員の考えや意見を提示することができるため、多様な考えを共有化することができます。1人に5枚程度の付箋紙を配布し、観察者は観察の視点に沿って、授業で見取った子どもの学習状況について自由に記述します。見取った内容（良かった点や改善点等）毎に付箋紙の色を変えることも工夫の一つです。

協議会で、記述した付箋紙を提示する方法には、次の二つがあります。

(7) 模造紙に貼る場合

黒板等に貼られた模造紙（指導案を拡大したものや時系列に活動を示したもの）に貼っていきます。

(4) 印刷して配布する場合

観察の視点毎に分類して用紙に貼り、印刷して配布します。

これら进行分析することによって、授業の課題性が見えたり、見取りの共通点や相違点が見えたりします。それらを協議の柱にすることで、協議をより深めることができます。



Q12 授業をビデオに撮って活用するにはどのようにするとよいですか

○ ビデオに記録することには、次のようなよさがあります。

- ◎ 教室内で起こっている様々なできごとをいろいろな角度からビデオ撮影しておくことで、授業者自身が自分の授業を映像で振り返ること（自己の振り返り）ができます。
- ◎ 研究協議会で話題となった場面について、もう一度、参加者全員で客観的に振り返ること（協同的な振り返り）ができます。
- ◎ 観察者がその場面を特に意識していなかったとしても、ビデオで振り返ることによって、その時には見えていなかった子どものつぶやきや表情、行動の様子等を再確認することができます。
- ◎ 授業の様々な場面について多角的に検討することにより、参加者一人一人のこれからの授業の改善に向けたヒントを得ることができます。

1 ビデオの撮影の仕方

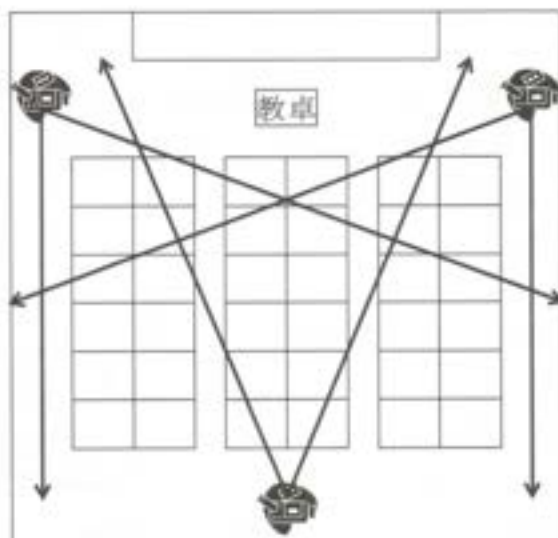
記録用ビデオは、研究協議会の柱や授業研究の観察の視点に合わせて、子どもと教師の表情やつぶやきを、映像だけでなく音声としても鮮明に記録することが必要となります。

そのために、観察の視点にしたがって教師の支援の様子や子どもたちの学びの様子を分担して撮影しましょう。



(1) 具体的な撮影の仕方は

学習をしている子どもの様子や話し合い活動をしている子どもの表情を撮るには、教室の後ろに固定した1台のカメラだけで撮影するだけでは不十分です。できれば、複数台のカメラを用意して多角的に撮影することを考えてみましょう。例えば、学級全体を見取る場合には、左図で示した位置に三脚を使って固定カメラを設置しておくことで授業の全体像を撮ることができます。



指導案の内容によっては、移動カメラで特定の子どもやグループの姿を追いかけることも必要です。この場合、授業の邪魔にならない範囲でできるだけそばに近寄って活動の様子を撮影しましょう。

また、実際に授業を受ける子どもになったつもりで座席に座り、ビデオカメラを片手で持ち、子どもの視線で教師の指示内容や板書、個別支援の様子等を追いかけて撮影する方法も考えられます。

(2) 録画する際に、注意すべきことは

- ・ ACアダプターは邪魔になるので、バッテリーは予め充電しておきましょう。
- ・ 三脚をセットする場合、机間指導の妨げにならないように気を付けましょう。
- ・ 研究協議会で活用できるように、場面の時刻（経過時間）を記録しておきましょう。



2 研究協議会におけるビデオの活用の仕方

(1) 授業後、すぐに研究協議会がある場合には

協議の中心となりそうな場面の時刻（経過時間）を確認しておき、子どもの見方について意見が分かれた場合等に、ビデオを再生して全員で客観的に振り返りましょう。

(2) 研究協議会までの時間がある場合には

録画したDVテープから映像をDVD化したり、パソコンに取り込んだりしておくと、テープを巻き戻すよりはるかに瞬時に特定の場면을再生できます。また、授業中の教師と子どものやりとりの様子を文章化する際にもたいへん便利です。

ア 映像をDVDレコーダーを使って、DVDにワンタッチダビングする方法



家庭用のDVDレコーダーにより、iリンクケーブルを用いてDVカメラとDVDレコーダーを接続すると、DVD-R等のメディアに簡単にダビングができます。DVDディスクには、いろいろな種類（DVD-R、DVD-RW、DVD+RW、DVD-RAM等）があるので、該当機種で利用可能なものを調べましょう。

イ 映像をコンピュータに取り込む方法



Windows XPに標準添付されているソフト（Windowsムービーメーカー2）を使って、ビデオ映像をコンピュータに取り込む（ビデオキャプチャー）と、研究協議会での場面の頭出しがスムーズに行えます。また、ライティングソフトを使ってDVD化することも可能です。

詳しくはマイクロソフト社の下記ページを参考にしてください。

<http://www.microsoft.com/japan/windowsxp/using/moviemaker/default.msp>

Q13 授業後の協議会の充実を図るためにはどのような方法がありますか

校内で協同的に授業研究を行うには、授業後の協議会の充実が不可欠です。授業後の協議会を、授業者はもとより、観察者にとっても、学校全体にとっても、意義のあるものとするためには、授業記録を効果的に活用することがポイントとなります。そこで、付箋紙を有効に活用して協議会を行ったH小学校の実践と、ビデオを有効に活用して協議会を行ったI小学校の実践を基に、協議会充実のためのポイントについて考えていきます。

<H小学校の取組>

1 協議会の課題の整理

H小学校では、まず従来より行ってきた協議会の在り方（「授業者の反省」→「質疑応答」→「本時のねらいや授業の主題などにかかわる意見交流」→「指導講話」）の課題を次のように整理しました。

- ① 意見を言う人が決まってくる。
- ② 何について話したらいいのかははっきりしていないので、参加者が意見を出しにくく、受け身的になる。
- ③ 意見が少なく、司会者が無理に参加者から意見や感想を引き出そうとしてしまう。
- ④ 観察者がそれぞれの見方に基づいた意見を言うので、意見交流が深まらない。
- ⑤ 校内研修として行っている授業なのに、協議内容が研究主題と噛み合わない。

2 付箋紙法の導入

協議会に付箋紙法を導入するに当たり、H小学校は教育センターに相談しながら取組を進め、以下のような手順で協議会を行いました。

- ① 授業前に観察者一人一人に5枚程度付箋紙を配布する。
- ② 観察者は、指導案に明示された観察の視点に沿って、授業で見取った子どもの学習の状況等について自由に記述する。
- ③ 事前に指導案を拡大（180cm × 90cm）しておき、授業後、協議会場の黒板に貼った拡大指導案に、各自が記入した全ての付箋紙を、見取りの場面に合わせて貼っておく。
- ④ 拡大指導案の周りを参加者全員で囲むように座り、予め付箋紙の内容を読んでおく。
- ⑤ 協議会の進行役としてプロンプターを立て、プロンプターが協議会を進めていく。

3 付箋紙法の効果

H小学校では、付箋紙法を取り入れた協議会を連続して3回行い、その都度振り返ることで、継続的に協議会の持ち方を改善しました。その結果、付箋紙を用いた協議会のよさとして、以下の2点が明らかになりました。

- (1) 観察者全員の付箋紙が貼られていることによって、観察者全員の着目点とその中での自分の意見の位置が把握でき、協議会の流れが予測できるので、安心して協議会に参加できる。
- (2) 自分の見取りを記述した付箋紙を貼る行為が意見表明となり、発言しにくさが軽減され、話し合いの活性化を図ることができる。



H小学校の学習指導案及び付箋紙の記録は、P23からP24に示しています。

< I 小学校の取り組み >

1 協議会の課題

I 小学校では、校内授業研究会を年間 8 回行っています。どの授業も全員が研修できるように、全て木曜日の 5 校時に位置付けています。しかし、最近の学校を取り巻く状況により、1 クラスの児童だけを学校に留めることに不安があり、児童の安全への配慮から、児童を学校に留めなくて授業研究会を行う方法として、次のような方法を試行しました。

2 ビデオを活用した授業研究

- (1) 研究授業を協議会を行う日の午前中に行い、観察の視点に沿って研究主任がビデオ録画しておく。

研究主題：だれもが楽しんで学習する力を育てる—算数科を通して学ぶ力を育てる—
副題：自力解決能力を高める算数的活動の工夫
見取りの視点：自力解決の場における算数的活動はどうだったか。



録画した場面（全 20 分程度）
<導入> 教師による課題提示
<自力解決> ノート記述なども含む個々の活動
<集団解決> 発表と交流
<終末> 本時のまとめの在り方

- (2) 録画した授業を基に、協議会を進める。
- ① 研究部が中心となり、録画した授業を基に協議会場に授業の板書を再現しておく。
 - ② 参加者全員が録画した授業を見て、観察の視点に沿って気づきを記録する。
 - ③ 録画した場面毎にビデオを一時停止して、各自の記録を基に協議を深める。

3 ビデオ活用法の効果

I 小学校では、ビデオを活用した協議会を 3 回行いました。そのよさとして、以下の 4 点が明らかになりました。

- ① 授業者が、授業の意図を具体的に説明したい場面で、ビデオを一時停止させて説明等できるので、授業者の意図が参加者に伝わりやすい。
- ② 観察者が、授業で見過ごしたり十分把握できなかつたりした場面等を、ビデオで再度見直すことによって明確に把握でき、それを基に具体的な意見を述べることができる。
- ③ 実際の授業を観察していない参加者でも、ビデオを見て児童の活動の様子を見取ることができるので、協議会で意見を言いやすくなる。
- ④ 協議を深めたい場面や気になる場面について、ビデオを一時停止して全員で見ながら協議を行うことができるので、協議の内容を焦点化することができる。



児童の安全確保のために、研究授業の後、教職員全員でそのクラスの児童の下校指導をした後に、協議会を行っている学校もあります。

自校の協議会の課題を明らかにした上で、具体的な手だてを決め、その方法で継続的に取り組み、その都度振り返りながら、自校の実態に合う方法を見極めていくことが大切です。

＜付箋紙法を用いた協議会を実施したH小学校の学習指導案＞

1年〇組 単元「ながさくらべ」 全5時間（本時2時間目）

H小学校の研究主題

「豊かな心・確かな学力を育む学びの創造—ひびき合い、つながりのある学びの場の創造に向けて—算数科の授業研究を通して」



研究主題に基づく研究仮説

算数的活動を生かした関わりの場を設定すれば、ひびき合い、つながり合いが生まれ、子どもたちの学びが深まるだろう。

授業の見取りの視点

○自力解決や集団解決での児童のひびき合い、つながり合いの様子はどうだったか。
○そのための教師の手だてはどうだったか。

本時の目標 ○二つの長さを、直接比較や間接比較の色々な方法で比べることができる。

	主な学習活動	支援と指導上の留意点 ひびき合い・つながり合いのための手だては <u>下線部分</u>	評価
課題把握	1 前時を想起し、本時の課題をつかむ。 ○ドラえもんからの手紙を読む。	○長さ見つけをしたことを想起させる。 ○楽しんで課題解決に取り組みるように子どもたちがよく知っているキャラクターを登場させ、「 <u>お願いの手紙</u> 」という形で課題を提示する。 <u>＜教師と子ども＞</u>	
	<p>きのうは、長さを見つけてくれてありがとう。大変なことが起こったんだ。のびたくんが長さ大王につかまったんだ。どちらか長いか答えられなかったら、自由にしてもらえないんだ。どうやったら長い方が見つかるのか教えてほしいのだ。頼むよ。</p> <p style="text-align: center;">長さの比べ方を考えよう。</p>		
自力解決1	2 長さの比べ方について考える。 	○比べ方の方法がイメージできるような、示し方をする。 ①2本の鉛筆（違いが少ないもの・端をずらして） ②2本のひも（ぐにゃぐにゃに曲げて） ③カードの縦と横（※カードの縦横の位置を明確にするために、それぞれ赤と青で色分けしておく。）	【考】長さを比べる方法を考えることができる。 【表】自分の考えを分かりやすく発表することができる。
	<p>どちらが長いかはっきり比べるには、どうしたらいいでしょう。</p> <p>①2本の鉛筆 ・自分の筆箱の鉛筆を比べる。 ・隣の友達の鉛筆と比べる。<u>＜子どもと子ども＞</u> ・比べ方を発表する ②2本のひもテープ ・黒板に貼って比べる。<u>その比べ方を別の児童が説明する。＜子どもと子ども＞</u> ③カードの縦と横 自分で選んだ「お助け道具」で比べる。 <u>自分で比べた方法を隣の友達に説明する。＜子どもと子ども＞</u></p>	○児童のつぶやきの内容を生かしながら、比べ方を確かめていく。 <u>＜教師と子ども・子どもと子ども＞</u> 	【考】自分なりの方法で長さを比べることができる
自力解決2	3 カードの縦と横の長さの比べ方について話し合う。 黒板で比べ方の説明をする。 <u>その比べ方を別の児童が説明する。＜子どもと子ども＞</u> <u>最も分かりやすかった友達の方法で、カードの長さ比べをする。＜子どもと子ども＞</u>	○カードは、一人ひとりに渡す。「お助け道具」として、「おりばし」「ブロック」「紙テープ」「方眼が印刷された紙」を示す。 ○一人で比べてもいいし、友達のやり方を見てもいいし、隣の友達と一緒に比べてもいいと指示する。 <u>＜子どもと子ども＞</u>	【知】長さ比べをするときのポイントを理解することができる。
集団解決	4 本時のまとめをする わかったことをドラえもん知らせる手紙を書き、発表する。	○説明の仕方につまずいている児童の方法については、教師が児童の言葉を引き出しながら、説明を補助する。 <u>＜子どもと子ども＞</u> ○自分の考えと比べながら、聞かせる。	
整理と発展		○本時で行った活動を振り返り、長さ比べのポイントや方法を確かめる。	
		・くっつける。・端をそろえる。・まっすぐにする(伸ばす)。 ・折って重ねる。・写して比べる。・〇〇のいくつ分	

＜付箋紙に記述された内容＞（下線はひびき合い・つながり合いにかかわる表現）

＜自力解決1＞

鉛筆比べで、先生が比べることよって、子どもたちがより確かな言葉で表現し上っていた。

鉛筆は下でそろえて、テープは上でそろえた。（子どもによって違う）子どもの発想を肯定するか、両方同じように説明するか。

鉛筆を比べるとき、友だちの操作をよく見ていて、つぶやきも多く響きあっていた。

長さ比べの時、前で操作する人と「それを言葉で教えてくれる人」と言ってお互いに説明させていたのが良かった。

指名された子がひもの長さを比べる作業をしているとき、「きれいにならば・・・」「のびすといらいよ・・・」と口々に言っていた。すわっている子たちも一緒にしているようでも良かった。

2本の鉛筆の長さをとなりどうして比べる活動で、みんなで確認したことを実感し、学びが深まっていた。具体的な操作の重要性を感じた。

子どもの発表（発表）をつなぐための手だてを、1年〇組では、どうやっていっしょにするのですか。

＜自力解決2＞

自分のやり方で、お助け道具を使い比べる。早くは、より比べられるやり方（折って重ねる）で比べる。十分な算数的活動だと思います。

教具の準備がしっかりできており、算数的活動が十分にできた。（選択できるのがよい）
「作業的な活動」
「具体物を用いた活動」

子どもたちの中から、切ってみるといふ発想が出た。鉛筆ひも比べ（二つが離れている）をしている後なので、自然に出てくる考えだと思う。切り取る活動も具体的操作の中に入れても良いと思った。

自力解決の時、自分で見つけたことを自主的に教えたり説明している、つながっていると感じた。

自力解決の時にもう教え合っている子が多かったせい。お隣さんと教え合おうでは子どもの活動が少なかった。

発表の前に隣の人に教えてあげると練習になり良いと思う。自信を持って発表できるようにして、手だても必要。1年生は、児童の発表を、教師が補足したり復習したりすることが必要になり、児童の思いをキャッチしていくことが重要なのだと改めて思った。分かるやすかったと思う。

自力解決の時、先生の注意をよく守り、それぞれが自分のやり方で答えを導き出していた。その時、まわりの児童のやり方を見て、とてもすばらしい。

「つながる、かかわり合う」自分が確かめたやりかたを、隣どうしで伝え合っているところ。

自分の比べ方を全体で発表する前に、「隣の人に教えてあげよう」という活動を入れたのがいい。自分の考えも、友だちの考えも深まるよなきがする。

＜集団解決＞

Aさんの「折って比べる」という考えを、みんなが共有して、実際に折って比べているところ、響き合っていると感じた。

Aさんの「折って重ねる」の説明の時に、きちんと聞いていた子ばかりだった。やり方を確認しながら、みんな一緒にしても良かった。

解法を発表した後、先生が折って比べることをすすめていたが、必要なのは直接比較より間接比較の良さを取り上げた方がいいのではなかったでしょうか。

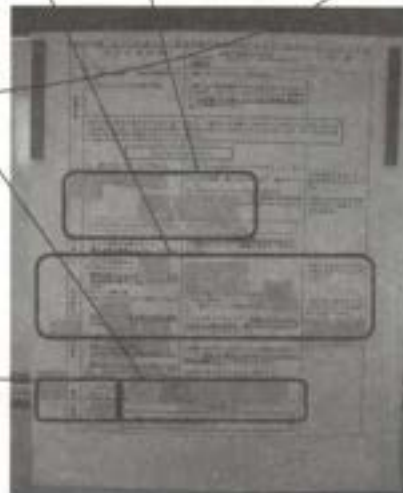
やり方の説明が、手元で見づらいようだった。聞こえていない子、自分の作業に没頭している子が全体の2/3だった。

カードの縦と横の長さを自分なりの方法で調べ、全体で発表する時、自分のしている方法を聞いて学習に広がりが出た。折って重ねる活動を全員でしたのほども良かった。時間があれば、自分の考えでない、他のやり方もやってみると良かったと思う。

＜整理と発展＞

絵や文でドラえもんへのお手紙を書く、ということ、自分なりの考えをとってもかわらない絵で一生懸命表現していた。書くことで、自分の考えもまとまるかな。

「1, 2, 3」・・・のあと、近くの人と教え合ったりしていました。先生のどんな意図がそこにあったのでしょうか。



Q14 協議会を深めるためには付箋紙にどのようなことを書くとよいですか

付箋紙を活用して進めていく協議会では、付箋紙に記述された内容が、研究主題に迫るものであればあるほど、協議会が深まります。研究主題に関わって、その時のありのままの子どもの姿と、それに関する自分の気づきや率直な考えを書きましょう。大切なのは、その記述を基に話し合いを深めていくことです。そこで、P24で紹介した付箋紙の記述内容を基に、研究主題に迫るための話し合いをどのように進めるとよいかということについて考えてみましょう。

<自力解決1の場面>

鉛筆を比べるとき、友だちの操作をよく見ていて、つぶやきも多く書きあっていた。

←ひびき合いにとって「見る」ことの大切さへの気づきです。なぜ「しっかり見る」ことができたのかその背景をさらに掘り下げていくことで、ひびき合いの場を作り出すための要素を明確にすることができます。

長さ比べの時、前で操作する人と「それを言葉で教えてくれる人」…と違って別の子に説明させていたのが良かった。

←本時における重要な手だてである「アイデアを出す児童」と「それを説明する児童」を決めて、その2人の間にひびき合いを作るという手だてのよさへの気づきです。どういった点で「良かった」と感じたのか、周りの児童にとっては説明が分かりやすかったのかなど掘り下げていくと、この手だての有効性が明確になってきます。

指名された子がひもの長さを比べる作業をしているとき、「きれいにすれば…」のぼすといいよ…」と口々に言っていた。すわっている子たちも二階にしているよととても良かった。

←ひびき合う子どもたちの姿を見取ったと感じた観察者の喜びが伝わってきます。子どもがどのような姿を見せていることが、ひびき合っているといえるのか、その姿は、その時の学習活動とどう結びついていたのかなどについて明らかにしていくことで、授業づくりに根ざした話し合いを深めていくことができます。

<自力解決2の場面>

自力解決の時自分で見つけたことを自主的に教えたり説明していた、つながっていると感じた。

自力解決の時にもう教え合っている子が多かったせいか、「お隣さんと教え合おう」では子どもの活動が少なかった。

自分の比べ方を全体で発表する前に、「隣の人に教えてあげよう」という活動を入れたのだから、自分の考えも、友だちの考えも深まるよと気がする。

↑「隣の人に教える」という手だてのよさが記述されています。「隣の人に教える」活動は多くの児童が自発的に行っているようですが、先生が指示した時には「子どもの活動が少なかった」という事実も見取られています。なぜその時少なかったのか、活発にするにはどのような手だてがあったのかについて、その時の学習活動と結びつけながら協議することで、目指す授業の在り方が明らかになってきます。

<集団解決の場面>

やり方の説明が、手元で見づらいようだ。聞こうとしていない子。自分の作業に没頭している子が全体の2/3だった。

←多くの観察者が、説明をしている児童に注目していると予想される場面、それを聞いているはずの、全体の子どもたちに目を向けた貴重な見取りです。なぜそういう状況になったのかをさらに掘り下げることで、ひびき合いの場を作り出すための条件を明らかにすることができます。

以上のように、付箋紙に何が記述されているかだけでなく、そこから何を読み取り、どのように掘り下げていくのかが重要です。その役目を担うのが、プロンプターなのです。

Q15 プロンプターはどのように協議会を進めるとよいですか



プロンプター (prompter) とは、演劇界で使われる言葉で、辞書では「俳優の後見、俳優がせりふを忘れた時、陰からそっと教える係のこと」と訳されています。例えば、俳優がせりふを忘れてしまって次のせりふが出てこないときに、プロンプターからせりふの出だしの部分が伝えられ、それをきっかけとして俳優はせりふを思い出すことができるのです。つまり、プロンプターとは、俳優にせりふの全てを教えるのではなく、せりふを思い出すきっかけを与える役割を担う人なのです。

このことから、授業協議会におけるプロンプターとは、授業者や観察者が授業場面を振り返り、その時その時に感じた様々な思いや考えを思い出すきっかけを与える人といつてよいでしょう。

プロンプターには、自分の意見を交えることなく、参加者の思いを引き出し、参加者同士の対話が促進されるように進行していこうという心構えをもっておくことが必要となります。

H小学校の協議会の記録から、プロンプターの役割について考えてみましょう。

＊ P. 23のH小学校の学習指導案を参考にしてください。＊

<協議会に参加した人数：プロンプター(1)、授業者(1)、観察者(14)、指導助言者(1) 計17人>

プロンプターは、拡大指導案に貼られた付箋紙の記述を大まかに読み、付箋紙の記述内容が対立している集団解決の場面に着目し、この場面での観察者の意見のずれを取り上げ、協議会を始めることにしました。

<協議会開始 協議 その1>



P
集団解決の場面には意見が多く、対立する意見もあります。この集団解決の場面から協議会を進めていこうと思います。授業者の先生、そのあたりはいかがでしょうか。

プロンプターは、協議会での対話が活性化できるような場面を選択した上で、その場面についての授業者の振り返りを求めることから、協議会をスタートしています。



「集団解決の場面では、コミュニケーションを通して、いろいろな長さ比べの方法に気付いてほしいと考えていました。子どもたちは具体的な操作活動は楽しんでいましたが、何が分かったのかがはっきりしなかったように感じます。今回は、折って重ねて比べる(直接比較)、割り箸やテープに写し取って比べる(間接比較)方法が出てきて、折って重ねる方法を全員に経験させたけれど、次回は写し取る方法をちゃんと確認していきたいです。」

次にプロンプターは、付箋紙T①の内容を読み上げ、その付箋紙を記述した観察者に意見を求めました。

T① 解決法を発表した後、先生が折って比べることをすすめていたが、必要ないのでは？
直接比較より間接比較の良さを取り上げた方がよいのではないのでしょうか。



授業者は、みんながそれぞれ発表した後で、Aさんの「折って比べる」という方法をみんなでやってみる活動を仕組まれました。その場面に対して、T①は「必要ないのでは？」と書かれています。もう少し詳しく意見をお聞かせください。

プロンプターは、取り上げた場面について観察者からの見取りを詳しく聞き出すことを通して、その場面の振り返りを促し、より具体的な見取りの根拠を引き出すようにしています。



直接比較は、導入の鉛筆比べの場面でもう経験しているので、(間接比較の説明の後で)後戻りする必要はないと考えた。むしろ、長方形のたてと横のそれぞれの長さを、他の白い紙の端に写しそれぞれの長さに印をつけて比べていたBさんはすごいと思った。
(そういった)間接比較のよさを取り上げて経験させる方がよかったのではないかと思います。

T①

そこでプロンプターは、その場面について、授業者に再度意見を求めました。



授業者の先生はなぜ折る方法を全員に経験させられたのですか？

プロンプターは、授業者に問い返すことにより、その場面の振り返りを促し、授業者の指導の意図を引き出すようにしています。



授業者

本時のねらいとして、直接比較ができればよいと考えていました。導入場面で取り上げた鉛筆の長さ比べでは、比べる対象の長さがはっきり見えていたけれど、長方形のたての長さや横の長さ(青と赤で色分けしていたもの)は、はっきり見えていない。隣のクラスでは折って重ねるという方法が出なかったが、うちのクラスではその方法が出たので、しっかり取り上げて、どちらが長いかはっきり比べさせたいと考えました。

次にプロンプターは、付箋紙T②T③の内容を読み上げ、その付箋紙を記述した先生方に意見を求めました。

T② Aさんの「折って比べる」という考えを、みんなで共有して、実際に折っていたところが、響き合っていると感じた。

T③ カードの縦と横の長さを自分なりの方法で調べ、全体で発表する時、自分のしていない方法を聞いて学習に広かのが出た。折って重ねる活動を全員でしたのはとてもよかった。時間があれば、自分の考えでない、他のやり方もやってみると良かったと思う。

P



T②T③の方、「よかった」という意見ですが、いかがでしょうか。

プロンプターは、他の観察者の付箋紙の記録をもとに、同じ場面についての別の見取りを聞き出すことを促して、授業者と観察者との対話を生み出そうとしています。



「ひびき合う」場面として考えると、折って重ねる場面はひびき合いだと感じた。Aさんが発表している時にCさんはもう手元でまねをしていた。(だから、一人の子の方法を)先生がしっかり取り上げて、みんなでやってみるという方法は(ひびき合い・つながり合いの場をつくりあげるという視点で)大事だと思う。

T②



導入の場面での自分の鉛筆を並べて直接比べる方法が、長さ比べの方法として子どもたちには一番納得できているようだった。だから、この場面の長方形の縦の長さや横の長さを比べる場面では、どちらが長いかがはっきり比べることができていないDさんもいたので、(子どもたちが一番納得できていた方法で)先生と一緒にやるのはよかった。できれば、割り箸を使った方法や、紙テープを使った方法など、別のものに置き換えて比べる方法もみんなでやってみるとよかった。

T③

そこで、そのやりとりを聞いていたT④から、自主的に発言がなされました。

T④ Aさんの「折って重ねる」の説明の時に、きちんと聞いていた子ほどやめたそうだった。やり方を確認しながら、みんな一緒にしても良かった。



T④

(T④を書いたのはぼくなんです) Aさんが折って比べる方法を前に出てやって見せる時、その説明のことばがわかりにくかったのも、先生が支援として説明を補助されていたが、子どもの実際の行動と、先生の説明にズレがあった。よく見て聞いている子どもほど、すぐにやってみようとしていたので、(先生が説明しなくても、後回しにするのでもなく、子どもの説明の直後に)みんなでやってみた方がよかったのではないかと。子どもは自分でやってみたい、やりたくてしかたないという様子だった。

そこでブロンプターは、さらに他の観察者の意見を求めようと、授業者の意図を明確にした上で参加者全体に意見を求めました。

P



授業者の先生の意図としては、本時のねらいである直接比較の方法が子どもから出てきたので、それを（ひびき合いの場面として仕組むことで）しっかり経験させてつかませていきたいという場面だったわけですね。他の先生方、いかがでしょうか。

ブロンプターは、授業者の思いを確認しながら、他の観察者からの見取りを引き出そうとしています。



参加者からは、その場面についていろいろな意見が自主的に出されました。



折るという方法は、長さ比べの方法として、手っ取り早い方法だ。全員経験しておくことも大事なのではないか。

教科書では、絵本が素材として使っており、折って比べることはできない。本時は、折って比べられるように紙を素材として使っていた。ゆっくり、ていねいに（直接比較で）はっきり確かめられるものとして選ばれた素材なんだと分かった。



ブロンプターが、「折って比べる」という活動に、協議の場面を絞り込んだことによって、観察者から、具体的な見取りと意見を引き出すことができました。

<協議 その2>

次にブロンプターは、付箋紙の数の多かった自力解決2の場面に焦点を当て、子どもたちがどのように長さ比べを行っていたのかについて、協議を深めていきました。

P



発表に入る前の、自力解決の場面はいかがでしょうか。 子どもたちのひびき合いに関わる姿についての気づきがたくさん書かれています。この付箋紙（1枚取り上げて）を書かれた〇〇先生いかがでしょうか。

ブロンプターは、協議の場面を絞って、観察者の見取りを引き出そうとしています。ブロンプターが付箋紙の記述が多かった場面を取り上げているため、この後の観察者間の発言や対話が活発に行われています。最初の意見は、付箋紙を掲げ所に指名して求めています。



「つながる、かかわり合う」自分が確かめたやりかたを、隣どんで伝えてあげているところ。

発表の前に隣の人に教えてあげると練習になり良いと思う。自信を持って発表できるようにしていく手だても必要。1年生は、児童の発表を、教師が補足したり復習したりすることが必要になり、児童の思いをキャッチしていくことが重要なだと改めて思った。分かりやすかったと思う。

自分の比べ方を全体で発表する前に、「隣の人に教えてあげよう」という活動を入れたのはいい。自分の考えも、友だちの考えも深まるような気がする。

隣同士、教え合っている子どもたちがいた。

隣の子どものやり方を見て、改めて自分のやり方を振り返ろうとしている。

Fくんは、割り箸をもっていただけで、どう使っているのか分からない様子だった。だから、Aさんが折って比べる方法をやってみせた時、すぐに真似をしていた。

自力解決の時にもう教え合っている子が多かったせいか、「お隣さんと教え合おう」では子どもの活動が少なかった。



自力解決の時、先生の注意をよび守り、それぞれが自分のやり方で答えを導き出していた。その後、まわりの児童のやり方を見ていた。とてもすばらしい。

Eさんは隣の子どもがするのを見て自分のやり方を考え直していた。特別に、「隣の人に自分のやり方を教えてあげて」と時間を取らなくても、子ども同士の交流はそこそこにあると気付いた。

Gくんは、お助け道具は一切使わず、机の端に、縦の長さの印をつけて比べようとしていた。でも、机に落書きをしてはいけないと知っているため、何度も消したり書いたりしていた。Gくんの活動も取り上げることができたらいいのだけれど。

観察者は、子どもたちを見取った事実をもとに、見取りの根拠や考えを発言しています。これは、プロンプターが事前に取り上げる場面について、観察者の発言を促しやすいかどうかを考えて協議を進めたことによるものと考えられます。



意見が出尽くした所で、プロンプターは、研究主題に関わる見取りを整理しました。



自力解決の場面で、子ども同士のひびきあいをすでに作り出すことができるのですね。でも、自力解決できていない児童も、中にはいたようです。

P

プロンプターは、協議会で出された子どもの姿を研究主題と関連付けて、授業を価値付けると同時に、次の協議題になると思われることを強調しています。



以上のように、プロンプターは、授業者や観察者が意見を言いやすいように、付箋紙の記述内容を基にして、具体的に問いかけていく必要があります。さらに、出された意見の根拠を明確にしたり、出された意見をつなぎ、からませ、深めたりするような問いかけを行うことも必要です。そのためには、プロンプター自身が、授業者や観察者の言葉にしっかり耳を傾け、「もっと聞きたい。もっと詳しく知りたい。」といった関心を高め、それらの気持ちを、自分が発する言葉や表情や態度で表現し、協議会の雰囲気、互いに聞き合う雰囲気へと高めていくことが大切です。

【コラム】特別支援教育の授業研究を充実させるためにはどのようにするとよいですか

特別支援教育では、個々の子どものニーズに応じた教育的支援を目指すことから、実態に応じた綿密な授業計画、授業における丁寧な見取り、授業後の評価及び実態のとらえ直しなどが求められています。

では、特別支援教育の授業研究をより充実したものにするためには、どのようにすればよいのでしょうか。ここでは、学習指導案の作成等の準備段階の工夫や、授業後の協議会の進め方等について紹介します。

＜学習指導案の作成等の準備段階における工夫＞

1 学習指導案の作成における工夫（授業者が事前にすること）

授業において、個々の子どものニーズに応じた「適切な」教育的支援ができるかどうかを検証するためには、学習指導案の記載内容が明確であることが求められます。授業者は作成するときに、次のようなことに留意しましょう。

記載項目	記入上の留意事項	記入例
子どもの実態	○特に本単元の活動と関係する観点を中心に焦点化する。 ○状況や表情、動作等を具体化する。	○活動内容に関する事物等、具体的な物や活動時の写真を提示することで、活動を想起することができる。
単元や本時の個別の目標	○「～がわかる」「～ができる」等は、具体的な子どもの活動の様子や姿によって表現する。	○自分の好きな物を選んでパネルに貼り付けたり、指で指し示したりして伝えようとする事ができる。
本時の展開における教師の支援	○本時のねらいを達成するために、どのような手だてを講じるかを具体化する。	○カードの文字を読みやすくするために、カードを隠す紙をずらして1字ずつ提示する。

2 学習指導案の事前の読み合わせや事前検討会の実施（観察者が事前にすること）

どの研究授業においても観察者は授業参観前に学習指導案に目を通しておくのは当然のことではあります。特別支援教育の研究授業においては特にこのことが重要視されます。個々の子どものニーズに応じた「適切な」教育的支援がなされたかどうかを検証するためにも学習指導案を読み込んでおくことは大切です。

学習指導案を事前に読み込むことの利点

授業のどこを、どう見るかを整理した上で授業参観に臨めることにある。

具体的には…

- 事前に読み、見る視点が絞られていることで、子どもの実態、ねらい、手だてや方法などの各視点間の関連性で授業をより深く見取ることができる。
- そのことで、子ども理解をより深めることができる。

<授業参観後の協議会の進め方>

授業後の協議会において、授業中のエピソードでその場が盛り上がることも多く、ねらいに関わる意見交換や検討になると発言が少なくなることがあります。「授業のどこをどう見てよいのかよく分からない。」「授業のねらいや指導の手だてが適切だったのかが分からない。」等の感想が聞かれることもあります。

そこで、協議会をより充実させるために、「指導の手だての評価」を中心に進めてはどうでしょうか。指導の手だては、その授業のねらいや目的の実現のために講じられるものなので、その評価によって、ねらいや目的の妥当性等を明らかにすることができます。

実際には、下図の①→②→③の順に検討して、指導の手だての評価を行います。

指導の手だての評価の観点と評価及び改善の視点

①:手だての実行状況の検討		②:目的・ねらいの達成状況の検討		③:目的・ねらいの妥当性の検討		指導の手だての評価	改善策				
指導の目的・ねらいの達成のために、計画されていた指導の手だてが	講じられた	⇒	目的・ねらいは	達成した	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切だった	=	手だてが有効に機能した	⇒	OK
				達成しなかった	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切ではなかった(一応手だては講じたが、難度が低すぎて容易に達成した等)	=	手だての有効性が確認できない・手だての評価ができない	⇒	目的・ねらいの見直しが必要であり、より詳細に、より精度の高い適切な目的・ねらいの再設定
	講じられなかった	⇒	目的・ねらいは	達成した	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切だった(ねらい・目的は講じた手だてでは達成できなかったが、妥当性のあるものだった)	=	手だてが適切でなかった	⇒	手だての見直しが必要であり、より詳細に、より工夫した手だての再考
				達成しなかった	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切ではなかった(手だては講じたが、難度が高すぎて達成できない等)	=	手だての有効性が確認できない・手だての評価ができない	⇒	子どもの実態についての情報が不十分だったか、情報の受け止め方や活用に誤りがあるので、情報の見直しをして目的・めあての再設定
				達成した	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切だった(計画した手だてではなく、当日の子どもの様子から計画外の手だてに変更した等)	=	計画していた手だては講じず、目的・ねらいを達成したので、計画していた手だては不適切であった	⇒	子どもの実態についての情報を再度捉え直し、それに応じて手だての再考する
				達成しなかった	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切ではなかった(難度が低すぎて手だてを講じなくても目的・ねらいを達成した等)	=	手だてを講じていないので、手だての評価ができない	⇒	目的・ねらいの見直しが必要であり、より詳細に、より精度の高い適切な目的・ねらいの再設定
達成しなかった	⇒	目的・ねらいは	達成しなかった	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切だった(適切であるはずのねらい・目的を達成するための手だてが講じられなかった)	=	手だてを講じていないので、手だての評価ができない	⇒	目的・ねらいが適切だったにもかかわらず、手だてを講じることができなかった背景を探る	
			達成しなかった	⇒	目的・ねらいの内容の妥当性は	適切でなかった(当日の子どもの様子からねらいが妥当でないと判断した等)	=	手だてを講じていないので、手だての評価ができない	⇒	子どもの実態についての情報をより詳細に捉え直し、目的・ねらいもより適切なものへの見直しが必要	

検討の際に、子どもの姿や様子、行動をどのように解釈したかについて、授業者と観察者の双方がそれぞれの解釈をすりあわせることで、協議をより深めることができます。

第IV章 《授業研究の改善とその評価》

Q16 授業研究の改善にはどのような方法がありますか

授業研究をきっかけに、日々の授業を振り返り、授業改善を行うという P-D-C-A サイクルを、教師の日々の授業づくりに反映させることが理想的な授業研究の在り方だと考えます。そのためには、協議会を行った直後に、その成果と課題について振り返り、評価することが効果的です。そこで明らかになった成果や課題を全員で意識化し、それを基に継続して改善を進めていくことで、授業研究の意義を深めることができます。

P.21 で述べたように、H小学校では、協議会の充実に焦点を当てて取り組んできました。研究推進部が中心となって、協議会を行うごとに、その持ち方についてアンケート等で参加者の感想や意見を集約し、それを基に次回の協議会の方法を継続的に改善していきました。3回の協議会を終えた成果として、以下の点を挙げるすることができます。

- 1 授業参観及び協議会への一人一人の参加意欲や集中度が高まり、協議会では参加者全員が発言することができた。
- 2 協議内容が焦点化され、研究主題に沿った話し合いをすることができた。
- 3 本校の研究主題である「ひびき合い・つながりのある学びの場」について、一人一人の考えが深まり、具体的な子どもの姿や手だてをイメージしやすくなった。
- 4 算数科以外の授業等においても、子どものひびき合い・つながりのある学びの場を意識して仕組むようになった。

H小学校においては、付箋紙法の導入による協議会の充実に重点をおいた取組が、授業研究を活性化し、研究主題の具体的な追究につながっていることがうかがえました。

授業研究に携わった各立場の先生の、今回の取組を振り返っての感想を紹介します。

<授業者の感想>



このような方法は初めてでした。どのような流れになるのか、自分自身を振り返ることができるのかと少し不安がありました。
しかし、やってみると、自分でも話しやすく、たくさんの意見をもらうことができました。研究主題や授業のねらいに沿った話し合いになったので、充実した時間をもつことができたと感じました。

<参観者の感想>



付箋紙に気付きを書かなくてはならないので、今まで以上に授業を集中して見ました。
私は自分から意見を言う方ではないけれど、プロンプターから「どうですか」と促されたことで意見を言いやすかったです。

<プロンプターの感想>



第2回目担当
(研究推進者)

これまで司会者をやっていた時は、「沈黙をさけない。とにかく活発な意見交流をしたい。」という不安にも似た気持ちをもって協議会を行っていました。

しかし、今回の方法で行うと、活発な意見交流ができました。参加者もこちらの意図を知っているので快く発言してくれるようになってきていると思います。問いかける言葉に迷うなど、なかなか難しい点もありますが、失敗を恐れず、思い切って進め、経験を積んでいくことが必要だと感じました。



第3回目担当
(研究推進者)

私は、ブロック研でプロンプターをしました。ブロック研は、参加者全員が事前研を参観しているのです。二つの授業の具体的な比較も行うことができ協議が深まりました。

付箋紙法は、少人数での協議会ではそのよさがさらに発揮されるように思います。親しい同僚同士で、率直な意見交流の場が保障されるからです。こういったブロック研を活用して、多くの人がプロンプターを経験したらよいのではないのでしょうか。

<校長先生の感想>



子どもの学習の姿そのものが、協議会の話題の中心となってきました。それは、先生一人一人が、子どもたちの具体的なことばや表情や行動をしっかり見ようとし、それを付箋紙に具体的に記述しているからです。先生方の授業の見方の深まりを感じます。

また、協議会で全員が発言できるようになりました。プロンプターからの問いかけを、自分への問いかけだと感じているのです。自分の思いを明確にもっているのです。他の観察者の意見に対して関心が高まっているのです。

協議会の雰囲気もよく、先生方が、ひびき合い、つながりあってきていると感じます。

<担当した指導主事の感想>



1学期末に相談を受け、一緒に研修を続けてきました。研究推進者の方々が、課題意識をもち、その解決のために自主的に取り組まれていることにまず感心しました。

協議会には、先生方が意欲的に参加されていました。研究推進者の思いが、周りの先生方に受けとめられ、ともに取り組んでいこうとする前向きで伸びやかな雰囲気がありました。こういった取組が、授業力を高め、学校を活気付けていくのだと感じました。

授業研究の充実のための取組は、それに携わる教師の子どもを見取る目や授業を見取る目を深め、一人一人の授業力の向上を促します。そして、その取組によって育まれた同僚性や協働性に根ざした日々の教育活動によって、子どもたち一人一人が、学校が目指す姿に向かって育っていくのです。つまり、授業研究の充実、学校の豊かな教育活動そのものなのです。

Q17 授業研究の評価はどのように進めるとよいですか

1 授業研究（校内研修）の評価の意義

児童生徒のよりよい変容と指導者の識見を高め、授業力の向上を図るためには授業研究（校内研修）についての評価を行う必要があります。特に、学校努力事項等、学校全体で研究を推進していく際には、このことが重要になります。

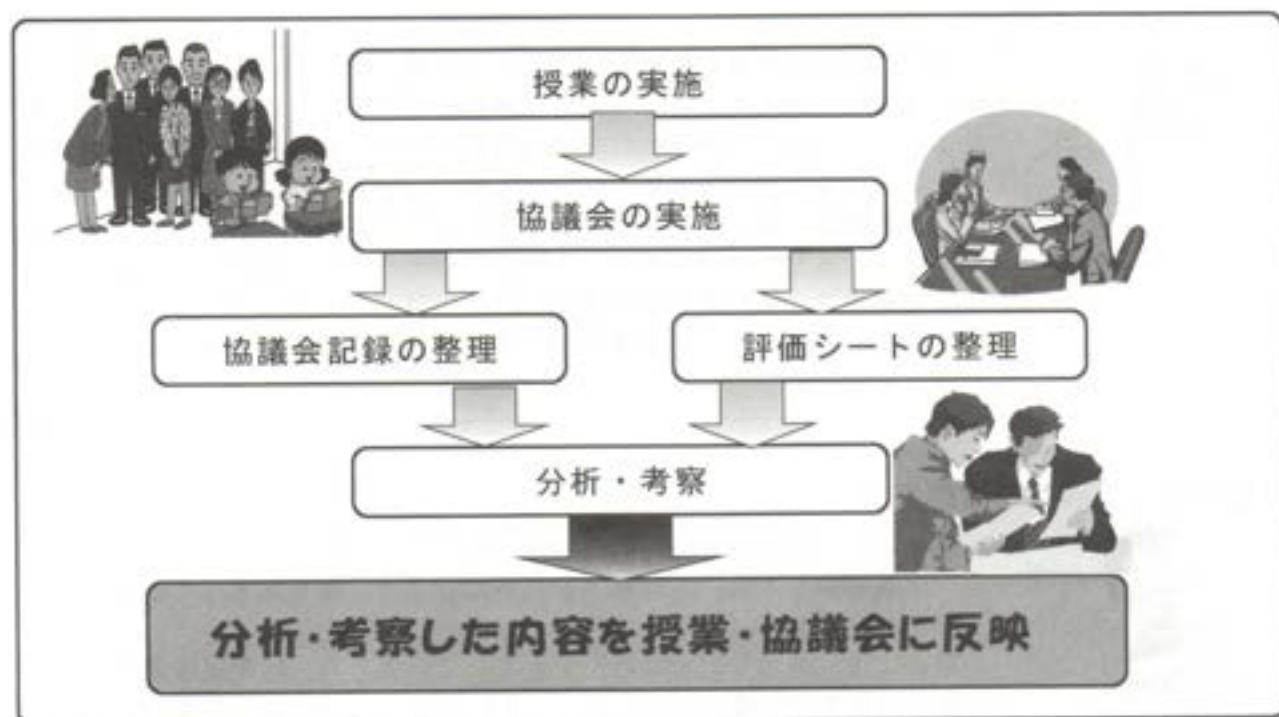
授業参観後の協議会の内容を、次回の協議会に反映したり、日々の実践に生かしたりしていくためには、授業研究を実施する際に、P.36に示すような評価シートを使用し、その記述内容を整理・分析して、次の協議会の事前資料として活用することが大切になります。



2 授業研究（校内研修）の評価の手順・方法

○ 授業研究（校内研修）の評価の手順

授業研究（校内研修）の評価の手順として、次のようなプロセスが考えられます。



参加者の忌憚のない意見や感想を記録として残すことで、良い点を次回に反映したり、課題の改善を図ったりすることが可能になり、協議会の質を高めることができます。協議会を充実させることにより、授業力の向上を図るためのポイントを見つけることができます。



○ 授業研究（校内研修）の評価の方法

次のような評価シートを作成し活用することが考えられます。

評価シート作成例

評 価 シ ー ト		思わ ない	あ ま り 思 わ ない	思 う	と と も 思 う	
月 日						
1	テーマ設定は適切であったか ※1、2に○をした人にお聞きします。どのようなことを改善したらよいですか。 ()	1	2	3	4	
2	話し合いの形態は適切であったか ※1、2に○をした人にお聞きします。どのようなことを改善 ()	1	項目の内容は実態に応じて吟味しましょう。			
3	話し合いは活性化していたか ※1、2に○をした人にお聞きします。どのようなことを改善したらよいですか。 ()	1	2	3	4	
4	日々の実践に役立つ内容であったか ※3、4に○をした人にお聞きします。どのようなことを改善 ()	1	具体的な改善点等が記入できる欄を設けましょう。			
5	新たな授業の見方や考え方をもつことができたか ※1、2に○をした人にお聞きします。どのような見方や考え方をもつことができましたか。 ()	1	2	3	4	
6	自分自身の課題を明らかにすることができたか ※3、4に○をした人にお聞きします。どのようなことが明らかになりましたか。 ()	1	2	3	4	
7	授業において工夫・改善してみようと思うことがあったか ※1、2に○をした人にお聞きします。どのようなことを改善したらよいですか。 ()	1	2	3	4	
※その他、気づき等		評価項目以外の気づき等が記入できる欄を設けましょう。				

最後に

誰もが、自らの授業力を高め、子どもが意欲的に取り組む授業を実施したいと願っています。授業力を高めるためには、教材研究の充実、授業展開における指導技術・授業評価力等の向上が必要になります。そのためには、教師自らの自己研鑽による研究・研修の充実を図ることは言うまでもありませんが、教職員による相互研鑽も有効な手だてとなります。同じテーマに基づいて研究を進め、互いの授業を見合うことで、互いの授業力を知り、いわゆる「建設的な批判」に基づき、具体的・効果的な改善策を見だし、授業の改善・充実につなげていくことのできる校内研修会の充実に向けて取り組みたいものです。



【参考文献】

- 国立教育政策研究所『学習意欲に関する調査研究』 2002年8月
- マネジメント研修カリキュラム等開発会議制作
『学校組織マネジメント研修～すべての教職員のために～
(モデル・カリキュラム)』
文部科学省 2005年2月
- 全国教育研究所連盟編『学校における授業研究』 東洋館出版社 1989年
- 群馬県教育研究所連盟『実践的研究のすすめ—新しい教育の創造—』
東洋館出版社 1994年
- 西村文男編『小学校 校内研修進め方事典』 教育出版 1984年
- 広島市教育委員会『教育に関する調査—調査報告書—』 2000年3月
- 広島市教育センター『授業研究ハンドブック』 2005年3月
- 全日本特別支援教育研究連盟機関誌『発達の遅れと教育』日本文化科学社 2003年11月

【実践事例への協力校】

- 広島市立原小学校
- 広島市立亀山小学校
- 広島市立亀山南小学校
- 広島市立筒瀬小学校
- 広島市立藤の木小学校
- 広島市立湯来南小学校
- 広島市立祇園東中学校

登録番号	広 X 6 - 2005 - 266
名 称	『授業研究ハンドブックⅡ』
主管課所在地	広島市教育センター 広島市東区牛田新町一丁目 17-1 (〒 732-0068) TEL(082) 223-3563
発行年月	平成 18 年 3 月